バカなテストの思いつき？

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカなテストの思いつき？

【Ｎコード】
Ｎ２０２９Ｕ

【作者名】
まあ

【あらすじ】
まあが考え付いた『バカとテストと召喚獣』の二次創作小説の原案です。反応しだいで連載化するかも知れません。

２０１１年９月２５日より『バカとテストと戦略眼』が正式に連載化になりました。
２０１１年１０月２２日より『バカとテストと戦略眼』が正式に連載化になりました。

僕と私と共同生活？　第１問

（……何で、こんな事になったんだろう？）

『吉井明菜』はドアの前に立ち、インターホンを押そうとするが今の自分の状況を認めたくないようで小さなため息を吐くと、

（……いくら、日本に残りたいって言ったって、従兄の明久くんと一緒に暮せってのはおかしいよ。何かあったらどうするの？　それに日本に残りたいって言うのは転校したくなかったからだよ。お友達と離れたくなかったからなのにどうしてわかってくれなかったの？）

明菜は進級を前に自分に起きた出来事に少し悲しくなってきたようで目にうっすらと涙を浮かべた時、

「いたっ！？」

「ご、ごめん！？　人がいるとは思ってなくて」

目の前のドアが突然開き、ドアは明菜の頭にドアがぶつかり、明菜は頭を押さえて涙目になると今日から一緒に住むはずの従兄『吉井明久』が明菜に気づいて慌てて声をかけると、

「明久くん？」

「明菜ちゃん、着いてたんだ。約束の時間になっても来ないから、探しに行こうと思ってたんだよ」

明菜は明久の顔を見上げると明久は明菜がいつまでたっても家に来ない事を心配していたようであり、苦笑いを浮かべる。

「う、うん。ごめんなさい。少しだけ、どうしたら良いかわからなくて」

「そうだよね。いきなり、ほとんど知らない街にくるなんて不安だよね」

明菜は小さな声で言うと明久は明菜の不安など理解していないようだが、笑顔で明菜が不安だろうと言うと明菜の持っていたカバンを手に取り、

「えーと、お帰り、明菜ちゃん、今日からよろしくね」

「は、はい。お邪魔します」

明菜に家に上がるように言うと明菜は遠慮がちに家の中に入るが、

「違うよ。明菜ちゃん、今日からはここに住むんだから、『ただいま』だよ」

「は、はい。ただいま。明久くん」

「うん。お帰り」

明久はここが今日から明菜の家だと言うと明菜は1度、深呼吸をしてからただいまと言うと明久は笑顔で明菜を向かいいれ、

「部屋はここね。テレビとかは一応、父さんたちの寝室から運んで

おいたけど、他のものは明日には着くんだよね？」

「はい。時間は明日の午前中に着くようにって指定しましたので」

明久は今日から明菜の部屋になる客間だった部屋に明菜を案内すると明菜はベットとテレビしか置いていない部屋を眺めながら、引越しの荷物は明日届くと言う。

「とりあえず、僕は夕飯の準備をしてるから、少し休んでてよ」

「えーと、良いんですか？」

「気にしなくて良いよ。それにこう見えて、料理は得意なんだ」

明久は明菜に休んでいてと言うと笑顔で料理は得意だと言い、キッチンに移動して行き、

（……男の子と2人暮らし？　どうしたら良いんのかな？　従兄妹だからって何か無いとは言いきれないんだから、お父さんもお母さんも考えてよね）

明菜は今日から始まる明久との共同生活が不安なようで大きなため息を吐く。

吉井明菜（よしいあきな）
所属　２－Ｆ
性別　女
得意教科：美術（４２３点）、音楽（３２８点）、英語（３４５点）
苦手教科：なし
総合得点：３２５０点

教科平均点：２８０点程度
備考
吉井明久の従妹。父親の海外赴任に友達と別れたくないため日本に残りたいと言うが、両親にはその言葉の意味がきちんと伝わらずにただ海外に行きたくないからと判断されて１人暮らしをしている明久と一緒に住むように言われ、文月学園に転校させられる。
性格はおとなしく言いたい事も上手く言えないタイプで巻き込まれ体質の女の子。転校時に振り分け試験を受けるが転入生はＦクラスに所属させられると言う事でＦクラスになる。転校前は進学校に通っており成績はかなりのもの。転校前は美術部に所属しており、絵を描くのが趣味。小さな頃にはピアノを習っていた。
召喚獣
武器：絵筆、スケッチブック
防具：女子の学生服
腕輪能力：コピー。腕輪の能力で召喚獣１体を複写する。複写により召喚された召喚獣は明菜の召喚獣を守るように自動で動く。

僕と私と共同生活？　第１問（後書き）

珍しく、かわいい女の子が書きたくなりました。明久との同棲ですから、ばれた時点で明久はＦＦＦ団に殺される可能性があります。

僕と私の共同生活？　第2問

「おはようございます？　明久くん」

「おはよう。明菜ちゃん、よく眠れた？」

「は、はい。明久くんは……眠ってないみたいですけど？」

明久と一緒に住む事になった翌日、明菜は目を覚まして居間に移動すると明久は徹夜でゲームをやっていたようであり、目は充血している。

「ちょっとね。止め時を過ぎじゃって徹夜になっちゃったよ」

「ダ、ダメですよ。しっかりと眠らないと身体を壊してしまいますよ」

「そ、そうだね。待ってて、今、朝ごはんを作るから」

明久は苦笑いを浮かべているが明菜にはゲームで徹夜をする事が理解できないようで明久の体調を心配すると明久は気まずそうに頷きながらも生活を改める気はなさそうであり、話を変えるためにキッチンに移動して行き、

「……明久くん」

「ゴメン。明菜ちゃん、僕の携帯を取ってくれる」

「は、はい」

明菜が大きくため息を吐いた時、ゲームの前に置いてあった明久の携帯電話が鳴り、明久は明菜に携帯電話を取って欲しいと頼む。

「もしもし、母さん、何かあった？　って、ちょっと困るよ！？……切れた」

「どうかしたんですか？」

「えーと、ウチの両親が明菜ちゃんの両親が話したみたいで生活費の管理は明菜ちゃんに任せるって」

「そうなんですか？」

明久の電話の相手は彼の母親のようで2人分の生活費の管理を明菜に任せるとの話で有ったようであり、明菜は首を傾げる。

「……どうしよう。そんな事になったら、僕の計画が」

「明久くん？　計画って何なんですか？」

「いや、でも、僕のせいでガスとか電気が止められると明菜ちゃんに迷惑がかかるし」

「あ、あの。明久くん、ガスとか電気とか止められた事があるんですか？」

明久は何か考えていた事があるのでぶつぶつと何かを言い始めると明久の口から出た信じられない言葉に明菜は顔を引きつらせると、

「し、仕方ないんだ！？　この世には僕を惑わすものがたくさんあるから悪いんだ！！」

「えーと、よくわかりませんけど、趣味にお金がかかるのはわかりますけど、そこまで無理をするのはどうかと思います」

明久は慌てて弁明をしようとするが明菜は呆れ顔であり、

「生活費と明久くんのお小遣いは私が管理します」

「……うん」

明菜は明久に生活費の管理を任せると酷い事になりそうだと理解したようで大きく肩を落とし、明久は明菜に迷惑をかけるわけにもいかないため、肩を落としながら頷く。

「それじゃあ、ご飯、作るから、待っててよ。時間を見て、商店街や後は文月学園にも案内するからさ」

「はい。お願いします。あ、あの。明久くん、今度、私にお料理を教えて貰っても良いですか？」

「え？　どうかしたの？」

明久はこれ以上、落ち込んでいても仕方ないため、気分を変えようと朝食作りに専念しようとすると明菜は昨日の明久が作った夕飯が美味しかったようで恥ずかしそうに明久に料理を教えて欲しいと言う。

「き、昨日のご飯が美味しくて、あの。やっぱり、女の子としては

男の子よりはお料理が下手なのは恥ずかしいかな？　って」

「そう？　別に気にする事でもないと思うんだけど……でも、明菜ちゃんみたいな美少女のご飯を食べられるようになるって考えると僕にとってはプラスだよね？」

「そ、それに共同生活なわけですし、明久くんにばかり負担をかけるわけにはいかないですから」

「そう言う事なら協力するよ」

明菜は共同生活として明久に頼りすぎてはいけないと思っているようであり、明久は何か打算的な考えがあるようで笑顔で頷く。

僕と私の共同生活？　第３問

「ここが文月学園ですか？」

「そうだけど……ねえ。明菜ちゃん、転入試験ってどうしたの？」

明久の案内で明菜は４月から通う事になる文月学園の校門の前に立つと明久は明菜が文月学園にきた事がない事に疑問を感じたようである。

「えーとですね。それなんですけど、転入試験をしてないんです。転入の許可を書類で出したら、受理をされて、４月からはＦクラスに転入すると連絡を受けてます」

「Ｆクラス！？　ちょっと待ってよ。明菜ちゃんって進学校に通って立って聞いたんだけど」

「はい。それなりに新学校みたいですね。あまり気にした事はないですけど、それより、どうかしたんですか？」

明菜のＦクラス転入は明久にとって驚きの事だったようで明久は慌てるが明菜は明久が慌てている意味がわからないようで首を傾げた時、

「吉井、春休みに学校にきて、今日は何をしたんだ！！」

「ひゃう！？」

「て、鉄人！？　べ、別におかしな事をしにきたんじゃな！？」

筋肉隆々の男性が明久を呼び、明菜はいきなりの事に驚きの声をあげて明久の影に隠れると明久の頭に拳骨が振り下ろされる。

「西村先生と呼べ。何度言ったらわかるんだ？　……ん？　見かけない顔だな」

「あ、あの」

「あ、明菜ちゃん、えーと、ウチの生活指導の西村先生、西村先生、この子は僕の従妹で４月から転入してくる吉井明菜ちゃん」

男性は明久の自分への呼び方に敬意が足りないと言いたげに言った時、明久の後ろに明菜がいる事に気づき、首を傾げるが明菜はいきなり明久に拳骨が振り下ろされた事で完全に怯えており、不安そうに明久の服をつかむと明久は頭を押さえながら明菜に男性を文月学園の教師だと紹介し、

「あ、あの。４月からお世話になります。吉井明菜です。西村先生、よろしくお願いします」

「吉井明菜？　あぁ、君がか、生活指導の西村宗一だ」

明菜は明久の後ろから身体を出すと深々と頭を下げ、西村教諭も明菜の名前は聞いているようで明菜に自己紹介をすると、

「鉄人、どう言う事だよ。明菜ちゃんは転入生なのに振り分け試験がないっておかしいだろ！？」

「……吉井、何度も言わせるな。西村先生と呼べ」

明久は明菜のために西村教諭に喰ってかかるが明久の頭の上には再度、拳骨が振り下ろされる。

「それはそうなんだが、学園の決まりでな。俺も口だしできないんだ」

「に、西村先生、頭をあげてください！？」

「役立たず」

「吉井！！」

「だって、そうだろ。姫路さんの振り分け試験もそうだけど、融通が利かなさすぎだろ？」

西村教諭は申し訳なさそうに明菜に頭を下げると明菜は目上の人に頭を下げられて慌てるが対照的に明久は文句があるようで西村教諭に喰ってかかり、

「……それに関しては俺だってどうにかしてやりたいがウチは試験校で実戦主義を掲げているからな。例外はどうにもならないんだ」

「それをどうにか……明菜ちゃん？」

「あ、明久くん、わ、私は何があったかわかりませんけど、西村先生も明久くんの言いたい事をわかってると思います。それなのに西村先生を責めてはいけないと思います」

「……そうだね。鉄人は融通は利かないけど、そう言うのはわかっ

てくれるんだった」

西村教諭は明久の言い分も充分に理解しているがどうにもできないと首を横に振る姿に明菜は明久を止め、明久は明菜の行動で冷静になったようで小さく笑みを浮かべる。

バカとテストと戦略眼　第1問

（……おかしい。Ｆクラスは代表を狙っている感じがしない）

Ｆクラスに試召戦争を仕掛けられてしばらくすると『真海天音』はＦクラスの攻撃の手がＤクラス代表である『平賀源二』にまで近づいていない事に首を傾げると、

「どうかしたかい？　真海さん」

「……代表。おかしいんです。Ｆクラスの攻撃が代表を狙っている感じがしないんです。何か時間を引き延ばしているような」

源二は天音が首を傾げている様子に何か感じたようで声をかけると天音はＦクラスの攻撃の意図が見えてこないと言い、

「別に何も考えてないだけではないですか？　所詮、豚野郎ばかりのＦクラスですし」

「清水さん？　豚野郎は言いすぎだと思いますけどＦクラスの代表はあの坂本くんですし、何かありそうな気がするんですよ」

『清水美春』はＦクラスはバカばかりだからだと言うが天音はＦクラス代表の『坂本雄二』だと言う事が気になると言う。

「真海さんはＦクラスの代表の事を知っているのかい？」

「えぇ、同じクラスにはなった事はないんですけど、同じ小学校出身なんですけど昔の坂本くんは神童とまで言われていました。Ａク

ラス代表の霧島さんも同じ小学校なんですけど昔は霧島さんに勉強を教えているほどだったと思います」

源二は天音に雄二の事を聞くと天音は雄二とAクラス代表の『霧島翔子』の関係を話すと、

「でも、昔の事だろ。気にする事ではないんじゃないかな？」

「そうです。所詮は豚野郎です」

源二は気にする事ではないと言うと美春は頷くが、

「……いえ、やっぱり、気になります。すいません。代表、私はこの試召戦争が時間稼ぎにしか感じません。引き延ばせば自分達の首を絞める事になる気がします。この教室は後ろに逃げ場所をないですし、全力でFクラスを攻める事を提案します」

「時間を引き延ばしている気がするって言ったってFクラスには決め手にかけるだろ。ここはじっくりと相手の出方を」

天音は全員でFクラスを殲滅しようと言うが源二の腰は重い。

「……せめて、Fクラスの狙いがわかれば良いんですけど、成績最低クラスでもEクラスではなくDクラスの代表を倒す手段。戦力差を埋めるとしたら、奇襲とか油断を……でも、Fクラスに代表を倒せるような人がいる？　1対1じゃ勝てないから複数で囲むとか」

「真海さん、お姉さまの数学はBクラス並みですわよ」

天音は源二を倒せる点数の人間がいるのかと首を傾げると美春から

数学でなら源二を倒せる人間がいると聞かされ、

「お姉さま？」

「島田美波お姉さまですわ」

天音は首を傾げると美春は『島田美波』と言う少女の顔を思い出しているようで目を輝かせ始め、

「それなら、数学でフィールドを展開させなければ問題ないね」

「そうかも知れないんですけど、異和感が……他に何か決め手になるもの、Ｆクラスは成績が最低ランク、総合点数はＦクラスの生徒の単体教科の点数を見た限りは１０００点以下……１０００点以下？　１０００点以下！！」

源二は美波が数学で試召戦争を仕掛けてくるのを防げば良いと言うが天音は首を傾げたままＦクラスの点数を考えていると何か思いついたようで声をあげ、

「ど、どうしたんだい？」

「１０００点以下です。総合点数０点の人間がいるんです」

「そんなバカがいるのですか？」

源二は天音の声に何があったかと聞くと天音はＦクラスには点数のない人間いると言い、美春はＦクラスを完全に見下すが、

「違います。０点って事は途中退席、または何かの事情があって振

り分け試験を休んだ人間。それが成績上位者の可能性があります。誰か振り分け試験の会場で途中退席をした人間がいませんでしたか？」

『そう言えば、確か、姫路さんが熱を出して吉井が騒いでたな』

天音は振り分け試験で点数がない人間がいないかとクラスメートに聞くとクラスメートの１人がＡクラス候補の『姫路瑞希』が途中退席した事を思い出し、

「それです。Ｆクラスが全力で仕掛けてこないのは姫路さんの回復試験が終わるのを待っているからです。代表、彼女が回復試験を終わらせる前にＦクラスを落としましょう」

「……そうだね。みんな聞いたね。Ｆクラスの作戦は時間稼ぎみたいだ。全力で潰すよ」

天音はＦクラスが時間を稼いでいる事を確信すると源二は大きく頷き、Ｄクラス全員でＦクラスを攻めると指示を出す。

深海天音（しんかいあまね）
所属　２－Ｄ
性別　女
得意教科：日本史、英語（１３０～１５０点）
苦手教科：数学、物理（９０～１００点）
総合得点：１４３８点
教科平均点：１２０点程度
備考
雄二、翔子と同じ小学校卒業だが別に友人と言うわけではない。
趣味はＴＲＰＧと言う少女。ＴＲＰＧ仲間の友人と戦術や戦略の話

を何時間でもする事が大好き。そのため、召喚システムと言う特殊なカリキュラムだとゲームでつちかった戦略を行かせるのではないかと言う理由で文月学園に進学する。ゲームが趣味なためファンタジー系のゲームや小説も好んでいる。

召喚獣

武器：弓

防具：レザーアーマー

バカとテストと戦略眼　第1問（後書き）

Ｆクラス対Ｄクラスで雄二の作戦を見破る人間が出てきたらどうなるだろう？と考えました。
書く場合は最初で原作をすべて破壊します。（爆笑）

バカとテストと戦略眼　第2問

「……雄二、Dクラスの代表が動き出した」

「何？　それは本当か。ムッツリーニ？」

Fクラスの教室でFクラス代表である大柄な少年『坂本雄二』に小柄の少年『土屋康太』だDクラスが動き始めた事を告げると雄二は考えていた事ではあるがDクラスは学力最低レベルのFクラス相手に全員で仕掛けてくる確率は低いと思っていたようで舌打ちをした後、康太に聞き返す。

「……本当だ。信じられないなら確認しろ」

「そうだな。代表の居場所は確認できるんだよな。確かに平賀がこっちに向かってきているな。それなら、姫路を使わないで島田の数学で、ムッツリーニ、島田に伝えてくれ。Dクラス代表が動き出したから、数学で狙ってくれ！？」

『代表、島田が討ち取られた！！』

「何だと！？」

康太は雄二にDクラス代表の居場所を確認するように言うと雄二は直ぐに次の作戦に移ろうとしたようで数学だけならBクラス程度の成績を持っている『島田美波』を使おうとするが指示が前線に伝わる事なく、美波が討ち取られたと言う情報がもたらされ雄二は声をあげるが、

『近藤、須川、戦死！！　補習室送りになったぞ』

『坂本、どうしてくれるんだ！！　俺達のアイドル木下が、木下が』

雄二の元には次々とDクラスに討ち取られたFクラスの名前が伝えられ、その被害はすでにクラスの3分の2の戦力を削られており、

「どう言う事だ？　どうして、Dクラスがこんなに早く動けるんだ？　おい。明久はどうした？　あのバカ、時間稼ぎもできないのか？」

「残念ですね。坂本くん、あなたの作戦は読み切りましたよ」

雄二はDクラスの早すぎる歩みに舌打ちをすると観察処分者であり、召喚獣の扱い方が誰よりも長けている『吉井明久』の名前を出すがその声にDクラスの主力生徒と英語の単層教諭である『遠藤教諭』を引きつれた天音が姿を現し、

「吉井くんなら、玉野さんに任せました。今は可愛くして貰っているはずです」

「可愛く？　お前、何を言っているんだ？」

天音は雄二の言っていた生徒はクラスメートの『玉野美紀』に任せたと言うが雄二は天音の言葉の意味がわからずに首を傾げた時、

「アキちゃぁぁぁぁぁん！！！　これをきて、男子制服（そんなもの）よりアキちゃんには女子制服（こっち）の方が似合うからぁぁぁ！！！」

「ぼ、僕はアキちゃんじゃないからね！？　明久だからね！？　男

の子だからね！？　女子の制服何か着ないから！？」

廊下からは明久が何かおかしな事で女子生徒に追われている声が響き、

「後は坂本くんの切り札はそこにいる土屋くんと回復試験中の才女さんですか？」

「ちっ、ムッツリーニ！！」

「……Ｆクラス土屋康太が」

「Ｄクラス深海天音がＦクラス土屋康太くんに英語勝負を挑みます」

天音は雄二の手札を後２枚だと言うと雄二は舌打ちをして康太に指示を出すと、試召戦争用に準備していたのか保健体育の教師である『大島教諭』を引っ張り出して試召戦争を仕掛けようとするが天音は康太の宣言が承認される前に早口で英語勝負を宣言すると遠藤教諭から承認され英語フィールドが展開され、天音の前には彼女を２頭身にデェフォルメしたような姿で弓とレザーアーマーを装備した召喚獣が現れる。

「情報を調べるのは戦争の基本ですよ。坂本くん、神童と称えられたあなたもこっちは専門外だったようですね」

「……無念」

天音の召喚獣の弓は康太の召喚獣を撃ち抜き、Ｆクラスの教室のＦクラスの生徒は天音とともにＦクラスの教室を訪れたＤクラスに討ち取られて行き、

「……お前、誰だ？」

「あっ！？」

「誰？　すいません。時間稼ぎには付き合いません。どの教科から回復試験を受けているかはわかりませんが単体教科でも彼女は危険ですから、Ｄクラス深海天音がＦクラス代表坂本雄二くんに英語勝負を挑みます」

雄二は教室の状況にどうしたら良いのかおろおろとしている少女『姫路瑞希』に視線を送ると時間を稼ごうと天音に声をかけると瑞希は雄二の考えに気づき、回復試験を中断して試召戦争に参加しようとするが天音はにっこりと笑うと無情にも雄二に王手を宣言する。

「ちっ」

「残念でしたね。自分達に都合の良い作戦しかとれないでその後の展開を読む事を読む事を止めるのは指揮官や軍師としては3流以下ですよ」

雄二は舌打ちをして召喚獣を呼び出して天音を睨みつけるが天音はくすりと笑い、

「かもな。だけど、油断をしているのはそっちも一緒だろ！！　姫路、Dクラス代表平賀のところまで一気に駆け抜けろ！！」

「はい！！　Fクラス姫路瑞希が数学勝負を挑みます。試獣(サモン)召喚です！！」

雄二は自分が天音に倒される前に先にFクラス最強のカードである瑞希を源二にぶつけようとしたようで瑞希に突撃の指示を出すと瑞希は数学を選び、試召戦争を仕掛けようとするが、

「数学ですか？　試召戦争を始めて2時間程度、受けれた教科は数学ともう1教科、私に向かってこなかった事は彼女は英語の点数はまだありません！！　この勝負の決着後、直ぐに英語のフィールドを展開！！　回復試験前の教科なら0点で自動的に補習室送りです！！」

「ちっ」

瑞希の召喚獣の点数にDクラスの生徒は同様の色を隠せないが天音は冷静に瑞希の現在の状況を叫び、雄二は瑞希の点数を見ても冷静に指示を出す天音の様子に舌打ちをする。

「それではここで時間をかけるとこの後にEクラスに責められても困りますから、決めさせて貰います」

「……待った。この勝負は俺達の負けだ。そこで終結を前に1つ。同盟を提案したい」

天音の召喚獣は雄二の召喚獣に向かい弓を構えると雄二は両手を上げて降参だと言うが、

「すいません。そう言うのは事後処理にお願いします。何より、ここで終結させてしまうとこちらも都合が悪いですから」

「ちょっと待て！？　降参した人間に矢を放つな！？」

「何を言っているんですか？　これは戦争です。お互いの全力を命をかけて戦うものに『降参』と言う文字はありません。どちらかが倒れるまで戦闘は続くんです！！」

天音は攻撃の手を緩める事はなく、雄二はギリギリで天音の矢を交わして行き、

「あっ！？」

「マイナーアクションでブルズアイ、ソードダンスを使用。ダイレクトヒットを宣言します！！」

雄二の召喚獣は全ての矢を交わす事が出来ずにバランスを崩した時、天音はにっこりと笑うと天音は熱くなってきているようで大声を上げて召喚獣に指示を出し、天音の召喚獣の矢は雄二の召喚獣の心臓部分を撃ち抜こうとする。

「……えーと、間違えました。今回は関係ありません」

「おい。今のはなんだ！？」

しかし、天音の言葉にFクラスの教室にいる生徒は何があったかわからないようで一瞬、空気が固まると天音は自分の行動に少し気恥ずかしくなったのか舌を出して謝ると雄二は意味がわからずに声をあげるが、

「まぁ、気にしない方向でお願いします」

「って、少しは躊躇しろよ！？」

天音は気にしないで下さいと言うとその瞬間に雄二の召喚獣の心臓部分には天音の召喚獣の矢が深々と突き刺さり、

「これで私達の勝利です」

『勝者Dクラス！！　試召戦争を終結する！！』

天音は雄二の召喚獣の点数が『0』になるのを見て笑顔を見せた時、教師が試召戦争の終結を宣言する。

バカとテストと戦略眼　第3問（後書き）

どうも、作者です。

アリアンロッドネタ。わかる人間はたぶん、あまりいない。

まあ、作者もリプレイしか読んでないのでスキルの使用タイミングと使用コストが微妙です。

天音は気分的にレンジャー／ダンサーと言った感じですね。

書いていて装備を魔導銃（キャリバー）の方がかっこよかったかな？と思いました。

誰も、わからないって。（苦笑）

バカとテストと戦略眼　お知らせ

どうも、作者です。

バカなテストの思いつきで書かせていただいていた『バカとテストと戦略眼』が正式に投稿小説になりました。

シリーズに入っておりますので楽しんでいただければ幸いです。

感想があまりないものを連載かよと言うツッコミが聞こえますが……

仕方なかったんです。書きたくなったんです。

他もやる気が出れば連載化となりますので応援していただければ作者が死なない程度に頑張ります。

以下は文字埋め用に天音の連載用の設定を掲載しておきます。

真海天音（しんかいあまね）
所属　２―Ｄ
性別　女
得意教科：日本史、音楽（１３０～１５０点）
苦手教科：数学、物理（９０～１００点）
総合得点：１４３８点
教科平均点：１２０点程度
備考
雄二、翔子と同じ小学校卒業だが別に友人と言うわけではない。
趣味はＴＲＰＧと言う少女。ＴＲＰＧ仲間の友人と戦術や戦略の話

を何時間でもする事が大好き。そのため、召喚システムと言う特殊なカリキュラムだとゲームでつちかった戦略を行かせるのではないかと言う理由で文月学園に進学する。ゲームが趣味なためファンタジー系のゲームや小説も好んでいる。

性格は少しおっとりとしているがＴＲＰＧの話を始めると西村教諭が引いてしまうくらいの勢いでまくしたて、西村教諭も問題児ではないためか強く言う事ができないようで苦笑いを浮かべている事がたまに見られる。同じようにＴＲＰＧの戦術や戦略の話を始めている時も同様である。

ＴＲＰＧ中は作ったキャラクターを演技（ロール）する事も多いため、試召戦争時にも自分で考えた設定で動き回る迷惑な１面も持ち合わせている。

容姿は赤みがかった茶髪のロングヘアーをサイドポニーでまとめている。瞳は茶色で少し垂れ目気味。性格が表すようにぽわぽわとした柔らかい感じで笑うが一度、スイッチが入ると目つきは鋭くなる。彼女をよく知るＴＲＰＧ仲間は殺意様が憑依したと言う。

身長は小柄で細身だが不釣り合いなくらいの大きな胸をしている。美人と言うよりはかわいい系の女の子。

成長の伸びしろとしては実在の戦史から戦略や戦術を学ぶ事を考え、日本史、世界史、また、アリアンロッドのクラスのダンサーやバードにはまる事で音楽にも伸びしろが見える。

召喚獣（天音評価　データ作成時）
メインクラス：ウォーリア
サポートクラス：ガンスリンガー
種族：ヴァーナ、狼族（アウリル）
ライフパス（出自：闇の一族、境遇：親友、目的：戦い好き）

キャラクターレベル：1
種族スキル：オーバーパス（1）
ウォーリアスキル：バッシュ（1）、ウェポンルーラー（1）、スラッシュブロウ（1）
ガンスリンガースキル：キャリバー（1）、ガンパレード（1）
一般スキル：アスレチック（1）、シックスセンス（1）
武器：魔導銃（キャリバー）、双銃仕様
防具：レザージャケット

僕と幼なじみな新任教師？　第１問

「と言う事で、お前達があまりにバカだから、俺以外に１人、専属でＦクラスの面倒を見てくれる教師を置く事にした。久島先生。入ってきてくれ」

朝のＨＲに『西村宗一』教諭はいつも騒ぎばかり起こす自分のクラスの生徒を呆れたような視線で見た後、１人の教師を教室に入って来るように言うと、

「えっ！？」

「明久、どうかしたのか？」

「明久くん、あの先生の事を知っているんですか？」

『吉井明久』は入ってきた若い男性教諭の顔を見て驚きの声を上げ、その両隣に座っていた『坂本雄二』と『姫路瑞希』は明久の反応に何かを感じたようで明久に声をかけるとその騒ぎは教室内に伝染して行き、教室全体がざわざわとしはじめたのを見て、

（……明久か？　そりゃあ、驚くだろうな）

『久島蓮夜』は数年前まで自分も同じような反応をしていたんだろうと思いながら苦笑いを浮かべ、

「久島蓮夜です。今日から皆さんと一緒にこの学園でお世話になる事になりました。今までは臨時職員をして他の学校の教師をしていたんですが、文月学園に正式に採用していただきました。基本的に

は専攻は英語ですが、西村先生の補佐と言う形での採用のため、君達には全教科を教える事になると思います。不慣れなところもあると思いますが、よろしくお願いします」

自分で持ってきたチョークで黒板に名前を書くと生徒達に頭を下げる。

「久島先生、１時間目はＨＲだ。悪いが俺は他に仕事も抱えているんでな。強化合宿の話を任せるぞ。生徒達も新任の先生に興味があるみたいだからな。１時間目が始まるまではここにいてくれ」

「はい。わかりました」

西村教諭はそう言うと教室を出て行き、蓮夜は持ってきた書類を教卓の上に置くと、

「レン兄、どうして、文月にいるの！？」

「いや、今、さっき、説明したばかりだろ」

西村教諭が出て行くのを見計らっていたのか明久が蓮夜に駆け寄ってきて驚きの声をあげると蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「久しぶりだな。俺が大学に入学してからだから7年ぶりくらいか？　大きくなったな」

「ちょっと、レン兄、僕はもう小学生じゃないんだから、そんな風に頭を撫でないでよ！？」

「ああ？　悪いな。どうしても昔の印象ってのは変えられなくてな」

久しぶりの明久との再会に優しい笑みを浮かべて明久の頭を撫でる。

「明久、お主と久島先生は知り合いのようじゃが」

「……えーと、『木下秀吉』くんだね。一応は幼なじみ。明久のというよりは明久の姉と幼なじみと言った方が正確かな？」

「……明久に姉？」

「へぇ、アキってお姉さんがいたんだ」

「そうなんですか！？　明久くん」

蓮夜と明久の様子に1人の男子生徒が声をかけると蓮夜は苦笑いを浮かべながら、『木下秀吉』の質問に答えると瑞希と女子生徒は明久に姉がいると言う情報を聞き逃さずに明久に姉の事について聞きたいようであり、数名の男子生徒は明久に姉がいると言う事実に明久に向けて殺意の視線を向け、

「ん？　明久、言ってなかったのか？」

「う、うん。だって、姉さんは……」

「……あぁ。何となく納得が言った」

蓮夜は何となくFクラスの人間関係を理解したようで苦笑いを浮かべる。

オリキャラデータ

久島蓮夜（クジマレンヤ）
年齢：２４
性別：男
備考
吉井玲・明久姉弟の幼なじみ。人当たりがよく、昔は明久を玲の魔の手から守る事も多々あった。そのため、蓮夜にとっては明久は今も昔も手のかかる可愛い弟であり、明久も蓮夜には頭が上がらないようである。西村宗一の補佐をする立場のため、どの教科もまんべんなく教える事ができ、フィールドの展開も全ての教科で行える。現在の試召戦争用の総合教科の点数は高橋洋子、西村宗一、福原慎の次の４番目。
基本的には向上心は強く、自分の授業以外は他の教師陣から専門的な事も聞いており、成績は向上中。赴任早々に船越先生に目をつけられるが上手く交わしている。

僕と幼なじみな新任教師？　第1問（後書き）

福原先生は実際、ただものじゃないと思っているため、教師陣の成績上位に置いてみました。

相変わらず、よくわからない設定ですが書くかはなぞ、と言うか書けないです。

まぁ、書くとしたらヒロインは玲か洋子でしょうね？

僕と幼なじみな新任教師？　第2問

「……しかし、明久、昔から頭が弱いとは思ってたけど、まさかここまでとは、あまり、成績が悪いと玲が戻ってくるぞ。少しは強化合宿で成績を上げないとな」

「……うん。気をつけるよ。そ、そう言えば、レン兄はどこに住んでるの？　やっぱり、おじさんとおばさんと一緒に実家？」

蓮夜は一通り、Ｆクラスの生徒の顔を一致させた後、西村教諭から渡された来週から始まる強化合宿の話を終えると明久の成績に頭を抱え、明久は蓮夜には頭が上がらないのか気まずそうに頷いた後、話を変えたいようで蓮夜がどこから文月学園に通っているのかと聞く。

「いや、就職して大分、経つし、実家には帰ってない。学園の近くに部屋を借りたよ。何より、この年になると実家に帰りにくいんだ」

「どうして？」

「……いい歳なんだから、1人で帰ってこないで嫁を連れて来いとな。お前もこの年になればわかる」

蓮夜は実家には帰っていないと言うと明久は首を傾げるが蓮夜はもう少し歳をとれば明久にもわかると言うと、

「そうなのか？　久島先生は見た目も悪くないし、もてそうなのにな」

「うむ」

「ないない。だいたい。就職するとなかなか出会いってものもないしな。彼女、彼氏を捕まえるなら絶対に学生のうちだぞ」

雄二は蓮夜の顔を見て驚いたように言うと秀吉も同意見のようであり大きく頷くが蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「まぁ。高校よりは大学での方が良いか？　コンパもあるし、いろんな場所から人が集まるから知り合いも増えるし」

『『何だと！？』』

くすりと笑うと大学に行くために勉強した方がいいのではないかと言うと数名の生徒達が蓮夜の言葉に反応し、普段、開かない教科書を机がわりのミカン箱の上に置こうとするが、

『こ、これは未開封のパン？　ウグイスパンなんか買ったかな？』

「……それはカビだ。捨てなさい」

ミカン箱の中からは見てはいけないものが多く出てきたようで蓮夜は大きなため息を吐くと、

「一先ずは今はＨＲだし、少し教室を片付けるか？　『姫路さん』は身体が弱いとも聞いているからね。クラスメートのためにも協力してくれないかな？　坂本代表も問題ないかな？」

「お、おう」

蓮夜は生徒達の情報もしっかり頭に入れているようで瑞希の体調を引き合いに出して教室の掃除をしようと雄二に提案し、雄二は教師である蓮夜から代表としての意見を聞かせて欲しいと言われた事に直ぐに対応できなかったようで頷いてしまい。

「それじゃあ、始めるか？　明久、掃除の指揮はお前が執れ」

「ボ、僕？　どうして」

「お前、家事は得意だったろ。後は家事が得意な人間はこっちに来てくれ」

蓮夜は明久に掃除の指示を任せると明久以外にも掃除ができる人間を呼び寄せて指示を出す人間を決めると、

「後は終わったら購買で飲み物くらい買ってやるから、飲みたいものを言え」

「レン兄、良いの？」

「これくらいは気にするな。まぁ、今日から勤務だから、来月まで給料は出ないから今月は苦しいんだ。安くて悪いがで許してくれ」

蓮夜は掃除を始め出した生徒達を見て飲み物を出すと言うと生徒達は声を上げ、明久は蓮夜の財布の中身を心配すると蓮夜は苦笑いを浮かべる。

僕と幼なじみな新任教師？　第3問

（……ノリは悪くないんだけどなぁ。もう少し、真面目に受けてくれれば良いんだけど、まぁ、俺も高校時代はあんなものだったし、言う権利はないかな？）

「久島先生、Ｆクラスの生徒はどうでしたか？」

蓮夜は昼休みにＦクラスを掃除した後に授業も行い、Ｆクラスの授業態度を思い出して苦笑いを浮かべると元Ｆクラスの担任である『福原慎』教諭が蓮夜に声をかけると、

「福原先生、それがなかなか……昔を思い出しますね」

「久島先生も元気でしたからね」

「いや、元気と言うか……巻き込まれていたと言うのが真実と言うか」

「それなら、どうして、視線をそらすんですか？」

蓮夜は苦笑いを浮かべて学生時代を思い出すと言うと福原教諭は学生時代の蓮夜を知っているようで小さく口元を緩ませると蓮夜は友人達に巻き込まれただけだと言うが自分にも後ろめたい事があるようで福原教諭から視線を逸らす。

「ん？　福原先生は久島先生の事を知っているのですか？」

「はい。久島先生が高校生の時に日本史の授業を受け持っていまし

たよ。彼も今は落ち着いていますが昔はかなり元気で。屋上からグラウンドまでワイヤーで降りてみたり、巨大な落とし穴を作って、いじめをしていた生徒を埋めてみたり、学園祭で無許可で花火を打ち上げてみたりと他にもいろいろと」

「……久島先生」

「わ、若かったんです。もう、そんな事はしません！！」

蓮夜と福原教諭が話している姿を見て、西村教諭が2人に声をかけると福原教諭は昔を少しだけ懐かしむように笑い、蓮夜が高校時代に行った騒ぎを話しだし、西村教諭は福原教諭から聞かされる蓮夜の高校時代の出来事に眉間にぴくぴくと青筋が浮かびだすと蓮夜は若さゆえの過ちだと言い、

「……当然です。おかしな行動は控えてください。あのバカどもがマネをしそうですから、教師としての自覚を持ってお願いします」

「いや、流石に異端審問会とか嫉妬で人に拷問にかけるような危ない事は……してたけど」

「……久島先生、あなたは何をしていたんですか？」

西村教諭は蓮夜に教師としての自覚を持つように言うと蓮夜は流石にFクラスの男子生徒のほとんどが所属するFF団みたいな事はしてないと言おうとするが、何かが引っかかったようで小さな声でつぶやくとその声は西村教諭の耳に届いたようで西村教諭は大きなため息を吐く。

「流石に冗談です。それより、西村先生、福原先生、授業の事なん

ですけど……」

「うむ。まだ、たいした話もしていないのに良く見ているな」

蓮夜は苦笑いを浮かべながら冗談だと言うとFクラスの授業態度や生徒の苦手だと思ったところを生徒事にまとめており、西村教諭と福原教諭に授業を行うアドバイスを求め始め、西村教諭は1時間しか授業を見ていない割には蓮夜が西村教諭に確認している生徒達の苦手分野は的確であり、西村教諭は感心したように頷くと蓮夜にFクラスの授業をする上で必要なアドバイスをして行き、

「久島くんも立派な先生ですね」

福原教諭は教え子である蓮夜の成長が嬉しいようで西村教諭に授業のアドバイスを聞いている蓮夜の姿を見て優しい笑みを浮かべる。

僕と幼なじみな新任教師？　第４問

「……やっぱり、自炊しないとな。流石にクラス全員にジュースは痛かった」

蓮夜は勤務時間を終えると大部、寂しくなった財布の中身を確認したようで食材を買うために商店街を歩いている。

「ん？　久島先生、夕飯の買い出しっすか？」

「……久島先生？」

雄二が長い黒髪の綺麗な少女と歩いており、蓮夜を見つけて声をかける。

「坂本代表、そうだよ。来月までは極貧生活だからね。それより、彼女さんですか？　坂本代表も隅におけないな」

「ち、ちげえよ！？　か、勘違いするなよ。こ、こいつは……」

「……雄二の妻の『霧島翔子』です」

「妻？　まだ、結婚はできない年だから、婚約者か？　霧島さん、俺は今日からＦクラスの担当教師に赴任した久島蓮夜です。よろしく」

蓮夜は苦笑いを浮かべると雄二の隣に少女の事を聞くと少女は『霧島翔子』と名乗り、蓮夜は翔子に頭を下げるが、

「ちょ、ちょっと待ってくれ！？　こ、こいつは婚約者でも何でもない。ただの『幼なじみ』だ！！」

「幼なじみから結婚ですか？　じっくりと愛をはぐくんでいるんだね。俺は応援するよ」

「……久島先生、ありがとう」

雄二は翔子を幼なじみだと叫ぶが蓮夜は雄二の中にある感情も感じ取ったようで2人の様子ににっこりとほほ笑み、2人を祝福し、翔子は頬を染めて蓮夜に頭を下げる。

「しかし、羨ましいな。こんなにお互いを想いあえる幼なじみがいると言うのは」

「……いや、だから、久島先生、俺の話を聞いて……なぁ、久島先生、先生は明久と幼なじみなんだよな？」

「正確に言えば、明久の姉の玲とだな」

蓮夜は翔子の様子に苦笑いを浮かべると雄二は翔子との関係を否定しようとするが、その途中で蓮夜にも幼なじみの女性がいた事を思い出す。

「実は何かあったとかないのか？」

「玲とか……まぁ、その話は置いておこう」

「何だよ。この状況で……」

雄二は反撃だと言いたげに蓮夜と玲の話を聞こうとすると蓮夜は雄二の肩に手を置き、

「……坂本代表、覚えておくんだ。間違っても酒に飲まれるな」

「お、おう。って、何があったんだ！？　久島先生！？　お、俺は聞いちゃいけない事を聞いたのか！？　って、言うか、そんな事を生徒の前で言うな！？　こ、この事を明久は知ってるのか！？」

「……生徒以前に俺は君達の人生の先輩だ。同じ事になりそうな人間にはしっかりとアドバイスはしないといけない。明久には……まぁ、知らない方が幸せな事もあるだろ」

「俺だって、そんなリアルな話は聞きたくないわ！？」

蓮夜は意味ありげな言葉を雄二に送ると雄二は蓮夜の身に過去に何があったかを理解したようで慌て、蓮夜はこの先に雄二にはそのような事が必ず起きると死の宣告をする。

「……久島先生、吉井のお姉さんにアドバイスを貰いたいから、連絡先を教えて欲しい」

「しょ、翔子！？　お前は何を言い出すんだ！？」

「……吉井のお姉さんとは話が合いそう。きっと、雄二との事で的確なアドバイスが貰える」

「く、久島先生、おかしな事を聞いて悪かった。俺と翔子は帰る」

「はい。気を付けて帰ってください。」

翔子は蓮夜と雄二の様子に玲に興味を持ったようであり、雄二は身の危険を感じたようで翔子を引っ張って蓮夜から逃げるように去って行く。

僕と幼なじみな新任教師？　第５問

「どうした？」

「レンくん、新しい勤務先はどうでしたか？」

蓮夜が夕飯の準備をしていると携帯電話が鳴り、蓮夜はディスプレイに映る『吉井玲』の名前に電話を取ると電話の先からは蓮夜の幼なじみであり、明久の姉である玲が直ぐに蓮夜に声をかける。

「ん？　そうだな。昔を思い出した」

「それは毎回、学校を変える度に言っていませんか？」

「まぁ、そうなんだけどな」

蓮夜は夕飯の準備より、玲との会話を優先しようとガスコンロの火を止めるとまだ片づけが終わっていない部屋のソファーに座り、玲に返事をすると玲は蓮夜の返事に不満げな声をあげ、蓮夜は電話の先の玲の様子を思い浮かべると、

「そうだ。担当したクラスに明久がいたぞ」

「アキくんがですか？　どうですか？　いつも通り、不細工で甲斐性はなかったですか？」

「……その言い方は止めろよ」

明久の事を話すが玲の明久の評価は低いようであり、蓮夜は玲の反

応に苦笑いを浮かべる。

「それで時差があるからいつもはメールなのに電話をかけてくるなんて何かあったか？」

「レンくんの声が聞きたくなっただけです」

「あぁ。そうか」

「照れてますか？」

「まぁ、否定はしないよ」

蓮夜は玲から電話に彼女に何かあったのかと聞くと玲はただ蓮夜の声が聞きたくなっただけだと言い、蓮夜は彼女の言葉に照れたようで首筋をかく。

「そうですか。満足です」

「そりゃ、良かった」

電話の先から聞こえる嬉しそうな玲の声で蓮夜は敵わないと思っているようであり、

「忘れてました。レンくんに報告しておかないといけない事がありました」

「報告？　何だ？」

玲は蓮夜に話しておきたい事があると言い、蓮夜は首を傾げると、

「3カ月だそうです。レンくんがこっちまで私に会いにきてくれた日の子です」

「ちょっと待て！？」

「冗談です。あの時は穴を開け忘れました」

玲は電話の先で子供ができたと言いたいのか意味深に言うと蓮夜は声をあげるが蓮夜の慌てように玲の声は少しだけ残念そうである。

「あ、あのな。今の状況でおかしな事を言うな。俺は教師だと言っても臨時教師であって収入だって安定してないんだぞ。文月にだっていつまでいられるかわからないんだからな。それに挨拶の前に子供ができたら、俺はおじさんとおばさんになんて言えば良いんだ？」

「大丈夫です。お父さんとお母さん、お義父さん、お義母さんにはすでに了承済みです。知らないのはアキくんだけです」

「……悪い。どこまでがホントでどこからが冗談かまったくわからない。それにどうして明久には秘密なんだ？」

蓮夜は玲の様子にため息を吐くが電話の先の玲はすでに根回しは終わっていると言い、蓮夜は眉間にしわを寄せるが、

「決まってます。大好きなお姉ちゃんが大好きなレンくんに手込めにされてると知った時のアキくんの顔を見るのが楽しみだからです」

「……いや、明久は俺と玲の関係を知ったら本気で俺は考え直すように言われる気がするんだ」

「アキくんに反対されたら考え直してしまいますか？」

「そんなわけがないだろ」

「はい。レンくんなら、そう言ってくれると信じてました」

玲は蓮夜を試すような事を言うが蓮夜の答えは決まっており、玲は蓮夜の答えに嬉しそうに返事をする。

「……試すような事は言わないでくれ」

「せっかく、同じ大学まで一緒に留学したのに先生になりたいと言って、こっちで決まりかけてた就職も蹴って日本に帰ってしまったレンくんが悪いんです」

「それに関しては反省してるって、悪かったよ。さびしい思いをさせてる」

玲は蓮夜と離れているのがさびしいようで口を尖らせると蓮夜は苦笑いを浮かべて玲に謝ると、

「そうです。私がどれだけ寂しいかレンくんはわかっていません」

「いや、まぁ、何だ……悪い」

蓮夜は玲のご機嫌を取りたいようだが言葉が見つからないようであり、

「レンくん、謝られると少し悲しくなります」

「あぁ。そうだな」

玲の言葉に蓮夜は気分を切り替えようと思ったようで1度、深呼吸をすると離れている距離を埋めるようにお互いの今の状況を話して行く。

僕と幼なじみな新任教師？　第５問（後書き）

どうも、作者です。

蓮夜と玲は恋人設定です。

なんか少しだけ落ち着いた感じです。

こんな設定は受け入れられますか？

まあ、玲をヒロインにするのはこの設定しか思い浮かびませんでした。（苦笑）

僕と幼なじみな新任教師？　第６問

「おはよう……あれ？　雄二、どうかしたの？」

「あ、明久！？　べ、別に何もねぇよ！！」

明久は登校すると雄二が何か考え事をしている姿に違和感を覚えたようで雄二に声をかけると雄二は昨日の放課後に聞いてしまった蓮夜と明久の姉の話があるため、声を裏返す。

「そうなの？　また、何かして霧島さんに釘バットで追いかけ回されたとかあったんじゃないの？」

「……あんな事、２度とあってたまるか」

明久は雄二の様子に翔子と何かと決め付けたようでちゃぶ台の上にカバンを置くと雄二は翔子に釘バットで追われた時の事を思い出したようで顔を引きつらせると、

「な、なぁ。明久、幼なじみが良くくっつくって話は聞くけどよ」

「何？　自分と霧島さんの事を言ってるの？　そうだね。雄二みたいな不細工が霧島さんみたいな美人の隣にいるのは許せないよ」

「あ？　てめぇ、何だと、バカ久」

「あ？　やるのか？　バカ雄二」

雄二は明久が蓮夜と玲の関係の事を知っているのか気になるようだ

が、明久の言葉が頭にきたようで睨みあいを始めようとするが、
「待つのじゃ、2人とも、雄二、お主は明久に聞きたい事があったのではないのか？」
「そうです。落ち着いてください」
2人のやり取りを見ていた秀吉と瑞希が2人を止める。
「そうだな」
「……命拾いしたな。雄二」
「あ？　それはお前だろ」
2人は秀吉と瑞希の言葉に一瞬、ケンカを中断しようとするが簡単に収まるわけはなく、取っ組み合いになりそうになった時、
「明久、坂本代表、朝からケンカはしない。みなさんも席に座ってください。HRを始めるぞ」
HRの時間になったようで蓮夜が教室に入ってきて2人を止めるが、
「レン兄、止めないでくれ。僕はこの不細工をグロテスクに殺さないと気がすまな！？」
「……明久」
「……雄二、命拾いしたな。レン兄に免じて今日のところは引いてやる」

明久は止まる事はなく、雄二につかみかかろうとすると蓮夜の声は少し低くなり、蓮夜の様子に明久は身の危険を感じ取ったようで捨て台詞を吐いて自分の席に座ると雄二も蓮夜の顔を立てようと思ったのか明久に続くように席に座り、

「それではＨＲを始めましょう……島田さん、どうかしたかい？」

「あの。久島先生、昨日だけで女子生徒５人から告白されたってホントですか？」

蓮夜はＨＲを開始しようとすると美波は蓮夜に暴動になりそうな事だが気になるようで蓮夜が女子生徒から告白されたと言う噂の事実を確かめようとする。

「……正確には7人と船越先生からです。当然、断りました」

『『『『殺せ！！！！！』』』』

蓮夜は女子生徒からの告白に困っているようで大きく肩を落とすがそんな蓮夜の様子がもてないＦクラス男子の怒りに火を点け、教室から叫び声が上がり始め、

「レン兄、逃げて！！！」

「ちょ、お前ら、落ち着け！！　島田、こんなところでそんな騒ぎになりそうな事を聞くな！！」

「そ、そうね。うかつだったわ。久島先生、逃げて！？」

明久、雄二、美波の３人はクラスメートの暴走に顔を引きつらせながら蓮夜に逃げるように叫ぶが、

「落ち着きなさい。ＨＲを始めますよ」

蓮夜は身の危険など感じてないようでＦクラスの生徒の様子に大きくため息を吐いており、逃げる様子はない。

僕と幼なじみな新任教師？　第7問

「あ、明久、不味いのじゃ、このままでは久島先生が」

「わ、わかってるよ。レ、レン兄、お願いだから逃げて！！　このままじゃ、レン兄が！？」

明久と秀吉はFクラスの生徒が嫉妬で人を殺せると思っていないであろう蓮夜に全力で逃げろと叫んだ時、

「へ？」

「まったく、HRを始めると言っているのが聞こえないのか？」

蓮夜はチョークを1本持つと戦闘を切って席から立ち上がり、蓮夜に殺意を向けていた『須川亮』に向けてチョークを投げると蓮夜の手から放れたチョークは亮の額の中心を見事に撃ち抜き、亮の額でチョークは粉々に砕けるばかりか亮はチョークの勢いに負けて後方に吹き飛び、畳に後頭部をぶつけて白目を向き、教室はあり得ない状況に一瞬の静寂が訪れ、蓮夜のため息混じりの声だけが響く。

「久、久島先生、い、いったい、何をしたんですか？」

「何？　教師と言ったら騒いでいる生徒にはチョークを投げると昔から決まっているだろ。俺もそれに従っただけだ」

「す、少しだけ古いと思います」

「チョーク投げの威力じゃないのじゃ」

雄二は目の前で起きた状況に顔を引きつらせて蓮夜に聞くが蓮夜は気にする様子はなく、雄二は蓮夜の様子に何か底冷えするような恐怖を感じたようで言葉づかいは敬語になっている。

「そうか？　俺の高校の時は騒ぐと福原先生に良く喰らったんだけどな。まぁ、もう、7年も前だから古く感じても仕方ないか。まだ、福原先生の威力には届かないって言うのに、やっぱり、投げる時に手首のスナップを加えて貫通力をあげて威力を増さないといけないな。これじゃいつまでたってもロッカーに穴を開けられない」

「か、貫通力？　レン兄、ちょ、ちょっと待ってよ！？　チョーク投げに貫通力はいらないから、貫通したら困るからね！？」

蓮夜は雄二の言葉に高校生時代に福原教諭から喰らったチョーク投げを思い出しているようで苦笑いを浮かべるが蓮夜の口から出るチョーク投げにはあり得ない破壊力に明久は声をあげ、教室の空気は完全に蓮夜を西村教諭と同等の獣扱いの空気になっているが、

「待て。明久、問題はそこじゃない！！　久島先生、今、何先生って言いましたか？」

「何先生って、福原先生だよ。最初はお前達の担任だっただろ」

雄二だけは蓮夜の口から出た人物の名前が信じられないようで聞き間違いだと思いたいのか蓮夜に確認するが蓮夜の口から出る名前は文月学園の生徒が知っている福原教諭で間違いなく、

「ちょ、ちょっと待って。レン兄、僕達の知っている福原先生とレン兄の言っている福原先生って同一人物？」

「明久、何を言ってるんだ？　なんでお前らに知らない先生の話をしないといけないんだ？」

明久は重ならない福原教諭の姿に慌てて声をかけるが蓮夜は眉間にしわを寄せると、

「良いか。お前らが約2年の学生生活を無事に過ごすとして怒らせてはいけないのは西村先生や保健体育の大島先生じゃない。福原先生だけは怒らせるな。これは俺の経験談だ」

「「「……」」」

蓮夜は真剣な表情で福原教諭だけは怒らせるなと言うと蓮夜の様子に先ほどまで蓮夜に殺意を向けていた生徒までも息を飲んで頷く。

僕と幼なじみな新任教師？　お知らせ

どうもです。

『僕と幼なじみな新任教師？』を連載化しました。

教師設定と言う異色の作品がどのような風に進んで行くかはわかりませんが引き続きよろしくお願いします。

以下は穴埋め用の蓮夜の設定です。

久島蓮夜（クジマレンヤ）
年齢：２４
性別：男
備考
吉井玲・明久姉弟の幼なじみ。人当たりがよく、昔は明久を玲の魔の手から守る事も多々あった。そのため、蓮夜にとっては明久は今も昔も手のかかる可愛い弟であり、明久も蓮夜には頭が上がらないようである。西村宗一の補佐をする立場のため、どの教科もまんべんなく教える事ができ、フィールドの展開も全ての教科で行える。現在の試召戦争用の総合教科の点数は高橋洋子、西村宗一、福原慎の次の４番目。
基本的には向上心は強く、自分の授業以外は他の教師陣から専門的な事も聞いており、成績は向上中。赴任早々に船越先生に目をつけられるが上手く交わしている。
明久には話していないが高校時代より玲と交際しており、現在も玲の突拍子のない行動に困りながらも仲良くやっている。

俺と美春とFクラス？　第1問

「おはようございます。西村先生」

「おはようございますですわ」

「ん？　青海に清水か。おはよう」

文月学園に入学して2度目の春。『青海夏輝』は幼なじみの『清水美春』とともに登校してくると校門の前には生徒達に『鉄人』と呼ばれ恐れられている『西村宗一』教諭が立っており、2人は頭を下げる。

「2人ともこの封筒の中にクラス分けが入っているから、確認して自分達のクラスに行くように……青海、あんな事があった上にこれは流石に酷いとは思ったんだがな。お前の本来の成績なら上手く行けばBクラスにはいや、点数が採点できた教科は普段のテストより良かったんだ。全教科受けていればAクラスも狙えたかも知らないんだがな」

「西村先生、気にしないでください。流石にどうしようもないですよ。元々、じいちゃんはもう長くないって言われていましたしね。それに続けて試験を受けても集中できなかったでしょうし」

入院していた夏輝の祖父が振り分け試験の途中に急変し、蓮は4教科ほど試験を受けた後、試験を抜けて祖父の入院していた病院に向かってしまい。4教科分の点数しか計算されなかったため、本来のクラスに振り分けられない事を西村教諭はクラスわけの入った封筒を夏輝と美春に渡しながら謝るが蓮は気にした様子はなく、

『青海夏輝……Ｆクラス代表』

『清水美春……Ｆクラス』

封筒を開けると夏輝と美春はＦクラスに振り分けられており、

「……美春。どう言う事だ？」

「ナツが代表か。ナツが代表なら美春の好きなようにできますわね。ナツ、この１年、美春に尽くしなさ！？　な、何をするんですか？」

「……人の話を聞け。お前の成績なら、Ｄは堅かったはずだろ」

夏輝は美春の成績に頭にきていようで額に青筋を浮かべながら美春に聞くが彼女は反省している様子もなく、夏輝がクラス代表と言う事で自分の好きなようにできると言おうとするが夏輝は美春の個性的なツインテールの髪の片方を引っ張り、額に青筋を浮かべたまま、もう１度、美春に聞くと、

「決まってるでしょ。Ｆクラスに行けばお姉さまに会えるからですわ」

「……そんなくだらない理由で」

美春はＦクラスに彼女の想い女性（びと）である『島田美波』がいるはずと目を輝かせて言い、夏輝は美春の答えがものすごく彼女らしいためか大きなため息を吐く。

「……青海、今更ながら、お前は大変だな」

「……なれたくはないんですが、なれました。付き合い始めて17年目になりますからね。個人的には凄く縁を切りたいんですが、美春とウチの母親が学生時代からの親友とか言ってますからね。たぶん、在籍中は確実に巻き込まれるでしょう。そう思うと胃の辺りがキリキリしてきます」

西村教諭は夏輝の様子に夏輝を励ますように肩を叩くと夏輝は自分の立ち位置にため息を吐くとこの関係は変わらないともう1度、ため息を吐くと、

「……悪いな。青海、この1年、お前の苦労は今まで以上になるぞ」

「どう言う事ですか？」

「……まぁ、教室に行けばわかる。青海、くれぐれも体を壊すなよ」

西村教諭はため息を吐きながらも夏輝の身体を心配する。

オリキャラデータ
青海夏輝（オウミナツキ）
所属　2―F
性別　男
備考
清水美春の幼なじみ。本来の成績はCクラス上位からBクラス下位程度。清水美春の幼なじみと言う立場のためか周りからの立ち位置は美春の保護者。彼女の暴走がある度に呼び出しがかかり、生活指導の西村教諭とは美春のせいで頭を下げてばかりである。
振り分け試験の途中で入院していた祖父が急変し、途中で病院に向

かったため、終了していた４教科のみ得点がある。語学に興味があるようで英語は得意。ドイツ語にも興味があるようでドイツからの帰国子女の美波にドイツ語を教わっていた時に美波は美春に見初められた。

得意教科：英語、英語Ｗ、現代文

苦手教科は特になし、得意教科以外は平均程度。（１５０点～１６０点）

設定

振り分け試験は受けた教科の点数はある。瑞希は最初の教科で退席してしまったため、全教科０点とする。

俺と美春とFクラス？　第1問（後書き）

Fクラス対Bクラスで美波が捕まった時に美春がいたらと考えました。
そして、雄二以外が代表のものも書いてみたいなと思ったため、代表に置いてみました。（苦笑）

俺と美春とFクラス？　第2問

「……酷いな。畳とちゃぶ台に窓は割れてるし」

「お姉さま♪」

「み、美春！？　な、何で、あんたがいるのよ！？」

夏輝と美春がFクラスの教室に着くと夏輝は教室の設備を見て顔を引きつらせるが、美春は設備など目にくれる事もなく、彼女の想い女性（びと）である『島田美波』を見つけるなり飛び付いて行き、美波は美春の登場に驚きの声をあげる。

「決まってますわ。お姉さまと同じクラスになりたくて、美春は頑張りました。お姉さまなら確実にFクラスだと思いましたから♪」

「そんな事に頑張らないで！？　青海！？　居るなら、美春を放して！！」

美春は美波のために成績をわざと落としたと言うと美波は驚きの声をあげると夏輝を見つけて美春を引き離すように言うと、

「あぁ。悪い。美春、いい加減にしろ」

「ナツ、何をするんですか！！　美春とお姉さまとの甘い時間を邪魔し……」

「うるさい」

夏輝はどこから取り出したかわからないが『スリッパ』で美春の頭を叩き、美春は夏輝につかみかかろうとするが夏輝から2発目が放たれ、

「島田さん、迷惑をかけたね」

「助かったわ……青海、そう言えば、何であんたまでここにいるのよ？」

夏輝は美春を気絶させると美春の首をつかみ、美波に謝ると彼女は本来、Fクラスの教室にいるはずのない夏輝にここにいる理由を聞く。

「あぁ。振り分け試験の途中でいろいろ有って早退したんだ」

「そうなの？　もったいないわね」

美波の質問に夏輝は祖父が死んだことを言う必要はないと判断し、早退したと言うと美波はもったいないと言った後、

「まぁ、良いわ。今年1年……美春の事をよろしくね」

「……あぁ。なるべく、島田さんに迷惑がかからないように頑張るよ」

「お願いよ。ウチは同性愛になんか興味無いんだからね」

夏輝に美春の世話を夏輝に押し付け、夏輝はため息を吐きながら言うと彼女にしては大問題のようで語尾を強めて言う。

「……あぁ。一先ず、席に着きたいんだけど」

「席は決まってないわよ。お願いだから、なるべく離れたところに美春を連れて行ってね」

「あぁ。それなら1番後ろに行くよ」

夏輝は席順はどうなっているかと美波に聞くと美波は席は決まっていないため、美春を自分の席から距離のある所に連れて行って欲しいと言い、夏輝は美春を教室の隅まで引きずって行き席に着いた時、

「……この成績で代表になれないのかよ。まぁ、バカばかりだろうから、代表を動かせば良いか？　……待ってろよ。成績だけがすべてじゃないって事を思い知らせてやる」

大柄で野性的な赤毛の少年が何か失敗した事があるのか眉間にしわを寄せながら教室に入ってくるが、

（……とりあえずは代表って何をすれば良いんだ？　試験召喚戦争か回復試験を受けて点数を回復させればEクラスには……このクラスじゃ、絶対に勝てないだろうな。それなら、一先ずは掃除して少しは環境を良くしないといけないよな）

夏輝は代表である自分の事を上手く使おうと企んでいる少年の事など気にかける事なく、教室設備の酷さと教室内ですでにちゃぶ台に突っ伏し寝ていたり、携帯ゲームを取り出して遊んでいるクラスメートの様子にため息を吐く。

「……少し待っていてください。替えを取ってきます」

（……教卓もガタがきてるのか。本当にどうしよう？　西村先生が言ったのはこう言う事か）

担任の『福原慎』教諭が入ってきてＨＲが始まるなか、『姫路瑞希』と言う女子生徒が遅刻をしてきた事で女子生徒の極端に少ないＦクラスでは彼女の存在は貴重なようでクラスメート達が騒ぎだし、それを諌めるために福原教諭が教卓を取りに教室を出て行くと、

「お姉さま♪　ぐぇっ！？　ナ、ナツ、何をするんですか？」

「……何をするじゃない。島田さんの迷惑を考えろ」

美春は今がチャンスと思ったようで美波に飛びつこうとするが夏輝は美春の制服をつかみ、美春は自分の勢いで制服で首を締まり、可愛げのない悲鳴を上げた後、夏輝に文句を言うが夏輝は美春の行動を押さえろと言い、

「……姫路さん、振り分け試験は退席したって言ったけど体調は大丈夫？」

「は、はい！？　だ、大丈夫です。あ、あの」

「えーと、青海夏輝。一応は代表です」

「そうなんですか？　姫路瑞希です。１年間、よろしくお願いします……あ、あの。青海くん、彼女は大丈夫なんですか？」

瑞希に声をかけると彼女は慌てた様子を見せ、夏輝は苦笑いを浮かべて名乗ると瑞希は夏輝に頭を下げると首が締まり、顔を青くしながらも未だに美波に襲い掛かろうとしている美春の様子を見て顔を

引きつらせるが、

「あぁ。これはこの程度じゃ、死なないから、大丈夫だよ。自己紹介する気はなさそうだから、こいつは清水美春。俺の幼なじみで美春の獲物は島田美波さん。それに姫路さんの3人がうちのクラスの女子だからうちのクラスは男ばかりだから気をつけてね」

夏輝は気にする事なく、瑞希に美春と美波に紹介すると、

「は、はい。あ、あの。青海くんは大丈夫だと言いましたけど、そろそろ、本当に危なくないですか？」

「やっと、大人しくなった」

瑞希は美春が口から泡を吹き出し始めたのを見て顔を引きつらせたまま夏輝に美春を解放するように言うが、夏輝にとっては美春が大人しくなっただけであり、大きなため息を吐く。

俺と美春とFクラス？　第3問

「それでは次は坂本くんですね」

「はい。すいません。ちょっと聞いて貰いたい事があるので前で自己紹介をしてもかまいませんか？」

「はい。別にかまいません」

福原教諭が教室に戻ってきて自己紹介が再開されると『坂本』と呼ばれた男子生徒は何か考えがあるようで教壇の上で自己紹介をしたいと言い、福原教諭の許可を取り、教壇の上に移動すると『坂本雄二』と名乗り簡単な自己紹介を済ませるとこの後に話す事が本題かのように教室全体を見回した後、

「さて、みんなに1つ聞きたい。Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか？」

『『『『大ありじゃあッ！！！』』』』

クラスメート達の設備に対する不満を煽り始め、クラスメート達は大声をあげる。

「……ナツ、あんた、何を考えているのですか？」

「いや、ここまで見苦しいのを見せられると悲しくなると思ってな」

美春は設備に対して文句を言いだしているクラスメート達の様子に隣に座っている夏輝の顔に視線を送ると夏樹はかなり呆れているよ

うで大きなため息を吐くが、

「俺はこの環境を変えるためにAクラスに対して『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

雄二は設備に対する理不尽な怒りを言っているクラスメート達の興味を引けたと思ったようで夏輝の事など気にする事なく、試召戦争の引き金を引く。

「坂本くん、悪いけど反対させて貰うよ。と言うか、代表でもないのに勝手な事を言わないでくれるかい」

「誰だ？」

「誰って、一応は代表の青海夏輝。坂本くん、君が何を企んでるのかは知らないけどやり方がかなり乱暴だね。みんなが君の考えに同調するほど単純だと思ったのかい？」

夏輝は雄二の言葉に反対だと言って立ち上がると雄二は騒ぎたてるだけではなく面と向かって反対の意見を出す夏輝を見て視線を鋭くするが夏輝は自分の名前を名乗り、

「えーと、坂本くんが勝手に試召戦争を仕掛けたいと言いましたが、代表として現状では試召戦争を仕掛ける気はありません」

「ちょっと、どうしてだよ！？　この設備は明らかに酷過ぎるよ。設備の向上を考えるのは当然の事だろ」

雄二の意見を全否定すると1人の男子生徒が声を上げ、

「えーと、確か、『吉井明久』くんで良かったんだよね？」

「う、うん。どうして、僕の名前を？」

「自己紹介をしてたんだから、当然の事だろ」

夏輝は声を上げてきた生徒の名前を『吉井明久』と呼ぶと夏輝に名前を呼ばれた男子生徒は驚きの声を上げるが夏輝は驚く意味がわからないようであり、夏輝はそんな明久の様子に大きくため息を吐くと、

「まずは勝てる要素が見つからない。教室に入ってから、クラスの様子を見させて貰ったけど、誰もこの設備への不満は漏らしてもそれを改めるために勉強をしていた人間はいない。それなのに試召戦争に勝てるなんて甘い事を言う神経が信じられない」

「そんな事はない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

「俺が？　ずいぶんと傲慢な言い分だね。根拠もないのに」

「根拠ならあるさ。このクラスには勝つ事のできる要素がそろっている。それを今から説明してやる」

自分が試召戦争に反対する理由を言うが雄二は口元を緩ませながら『自分がＦクラスを勝利に導く』と言い切り、夏輝は雄二の自信の意味がわからないと言うと雄二はこれからＦクラスがＡクラスに勝てる根拠を話してやると夏輝をクラスメート達と同じ『バカ』だと思っているようで上から見下ろすように言う。

俺と美春とFクラス？　第４問

「良いか」

「勝手に話し出すのは止めてくれないかい？　誰も君の講釈を聞くとは言っていないよ」

雄二は夏輝を含めたクラスメート達に自分の考えを聞かせてやろうとするが夏輝は雄二の言葉を遮ると、

「てめえ、どう言う事だ！！」

「最初から言っているだろ。俺は代表として試召戦争に反対している。勝手な言い分で自分の意見を押し付けるな。坂本、君にはクラスに対する命令権はないはずだ」

雄二は夏輝の行動が癇に障ったようで夏輝の胸倉をつかむが夏輝の主張は変わる事はなく、

「何でだよ。雄二の話を聞くくらいしても良いじゃないか！！　僕達が設備向上を考えたらいけないって言うのかい！！」

「誰も設備向上を考えたらいけないとは一言も言っていない。けどね。知ってるかい。試召戦争に負けた時に責任を取るのは代表である俺なんだよ。こいつが勝手に試召戦争を始めて負けても責任を取るのは俺。言っておくよ。このクラスは試召戦争に負けた時に反対していた俺を戦犯だと言う。絶対にね。そんな人間が勝手に始めた試召戦争で俺がどうして責任を取らないといけない？」

「負けねえって言ってるだろ」

明久はどうしても試召戦争をしたいようで雄二の言葉を聞けと言うが夏輝は代表としてこのクラスは信用できないと言い切り、雄二だけでなく、多くのクラスメートは夏輝の態度が気に入らないようで夏輝に罵声を浴びせ始め、雄二はこれだけの罵声を浴びせられると強気に出ていた夏輝でも折れると思ったようで口元を緩ませるが、

「この罵声を聞いて確信に変わったよ。お前達は今、俺が言った事を必ずやる。だから、試召戦争をやる気はない。これは代表としての決定事項だ。坂本、吉井、勝手に宣戦布告をしてみろ。俺は代表としてその時点で負けを認める。俺をつかまえてふんじばって試召戦争が終わるまで閉じ込めておいても同じだ。試召戦争の戦後処理は代表の仕事だ。仮に勝ったとしてもその時に俺は負けを宣言する」

夏輝は折れる事はなく、自分の胸倉をつかんでいる雄二の手をつかみ、彼を睨み返す。

「勝手な言い分を押し付けているのはどっちだよ！！　僕や雄二は試召戦争をしたいと言っているんだ。クラスメートの意見も聞かない人間を代表だと認めてたまるか！！」

「吉井、勘違いするな。意見を聞かなかったのはお前と坂本だ。試召戦争を本気で始める気なら、こんな騙し討ち見たいな事をしてこないはずだ。試召戦争をしたい理由をきちんと話して、クラスの過半数以上から信頼を得てから言いだすはずなのにそれをクラスメートを煽り、人を見下して高圧的に開戦に踏み切ろうとしたのは誰と誰だ？　俺は代表以前に1人の人間としてそんな人間は信じられない。これが1番の理由。そんな人間は扇動だけして置いて簡単に仲間を見捨てるし、自分が不利になったら簡単に掌を返す。そんな人

間にクラスの運命は任せられない。何より、姫路さんみたいに身体の弱い子もいるみたいだしね。負けてこれより、設備が落ちると致命的だ。君と坂本はずいぶんと仲が良いみたいだけ……」

「「誰がこんなバカと仲が良いがわけないだろ！！」」

明久は夏輝こそ傲慢だと言いたげに声をあげるが夏輝は正論で返すと明久と雄二は仲が良いと言おうとするが2人は声を上げてそれを否定し、

「……まぁ、どうでも良いよ。俺の言いたい事はこれまで、自己紹介ももう必要ないですね」

「はい。わかりました。坂本くんは自己紹介の続きをしますか？」

騒ぐなら勝手に騒げと言いたげに自分の席に戻って行くと福原教諭は雄二に自己紹介の続きをするかと聞く。

俺と美春とFクラス？　第5問

「ったく、代表が腰ぬけでやってらんねぇぜ」

「ゆ、雄二、落ち着くのじゃ。代表の言い分も正しいのじゃ。身体の弱いものがいるなら、負けてしまった時の事を考えると簡単には開戦には踏み出せんのじゃ」

休み時間になると雄二は夏輝に聞こえるように代表批判を始め出し、それを『木下秀吉』と言う爺言葉を使っている少年が止めている姿に、

「ちょっと、坂本、感じ悪いわよ。あんたの言い方にも問題があったんでしょ？」

「し、島田さん、でもさ、納得がいかないよ」

美波は雄二とも友人なようで雄二に反省するように言うが雄二は反省する姿も見せず、明久、雄二、秀吉、美波の４人は去年からの友人のようで明久は美波が自分達の味方をしてくれない事に戸惑っているようである。

「……あ、あの。代表は何も言わないんですか？」

「俺は何も言うつもりはないよ。自分の非も理解できないゴリラに話が通じるとは思えない……あっ、ゴリラと比べるとゴリラに失礼だよね」

「てめえ、バカにしてんのか！！」

「ゆ、雄二、落ち着くのじゃ！？」

「そうだ。姫路さん、俺と美春はこれから回復試験を受けないといけないんだけど、姫路さんも回復試験を受けるよね？　途中退席をしたなら、点数がないはずだし、申請をしといて問題ないかな？」

「は、はい。お願いします」

瑞希は自分の体調の事で迷惑をかけている事を理解しているようで表情を曇らせながら夏輝に声をかけると夏輝は雄二と話をする気はないと言うと４教科以外の点数を回復させないといけないため、回復試験を申請すると準備をするから瑞希にも回復試験を受けるように言うと瑞希は慌てて返事をすると、

「回復試験って、試召戦争をやる気になってくれたの？」

「……うるさいな。必要な事をするだけだよ。何も考えないで試召戦争を始めようとしたバカ２人に言っておく。俺は４教科しか点を取れてないんだ。それ以外で仕掛けられた時点で試召戦争は終わり、代表の点数も知らないで試召戦争を仕掛ければ簡単に終わっていただろうな」

明久は夏輝が試召戦争をしてくれる気になったと思ったようで夏輝に駆け寄ってくるが夏輝は当然の事をしていると言うと考えたらずで試召戦争を始めようとした雄二をバカにし、

「４教科とはどう言う事じゃ？」

「家庭の事情。それ以上もそれ以下もないよ。木下さん」

「ワシは男じゃ！？」

「え？　そうなの？」

「何を言ってるんだよ。秀吉の性別は『ひ・で・よ・し』だよ」

夏輝が４教科分しか点数がないと知り、秀吉は首を傾げると夏輝は秀吉の性別を間違えていたようで秀吉は声を張り上げるが明久は夏輝に向かい秀吉は男でも女でもないと言う。

「……吉井、去年からの友人なら、木下の話を聞いてやれよ」

「そうなのじゃ！！　誰が何と言おうとワシは『男』なのじゃ！！　代表はわかってくれるのじゃな」

夏輝は明久の反応にため息を吐くと秀吉は嬉しそうに笑うが、

「ま、待つのじゃ！？　な、なぜ、目をそらすのじゃ！？」

「……いや、何となく、吉井の言う事もわかるような気がした」

夏輝は秀吉の笑顔の可愛さに秀吉から目を逸らす。

俺と美波と文月学園　第1問（前書き）

思いつきです。

美波が引っ越してきた隣に同じ年の人間がいたらどうなるだろう？

と言う浅はかな考えです。

設定は文月学園入学の少し前の春休みからです。

俺と美波と文月学園　第1問

（……ったく、2人そろって旅行はまだしも、置き手紙して出かけてるのはどう言う事なんだ？　せめて、決まった時に話しておけよな）

『真田雪成』は春休みに惰眠をむさぼり、昼過ぎに目を覚ますとキッチンのテーブルには母親の字で『お父さんとラブラブな旅行に行ってきます。雪は弟と妹、どっちが良い？』と書かれた手紙が置いてあり、雪成は後半部は無視しながら冷蔵庫を開けるが、

「……何もないよ。一先ず、食材くらいは買ってくるか」

冷蔵庫には何も食材は入っていなく、雪成はため息を吐くと着替えて買い物に行こうとした時、家のインターホンが鳴る。

「はいはい。どちら様ですか？」

雪成は玄関で靴を履き替えていたため、ドアを開けて言うと、

『あの。今日から隣に引っ越してきた島田と言いますが』

隣の家に越してきたと言う夫婦らしき男女が立っており、引越し祝いを持ってきたようであり、

「ご丁寧にありがとうございます。すいません。両親は今朝から旅行に行ってしまっているもので、真田です。これから、よろしくお願いします」

雪成は2人に向かい頭を下げると、2人の後ろから小学生くらいの女の子と雪成と同じ年くらいの女の子がいる事に気づく。

『あの。真田……』

「雪成です」

『雪成くんは高校生？』

男性は雪成に聞きたい事があるようで雪成が高校生かと聞くと、

「えーと、4月から文月学園に通います」

『そうなんだ。良かった』

雪成は4月からだと言うと男性は安心したような笑顔を見せ、

『あの。お願いがあるんだけど』

「まぁ、俺にできる事なら」

『私達は今までドイツに住んでいたんで、娘2人は日本語があまり得意じゃないんだよ。それで……』

男性は自分達がドイツから引っ越してきたと言う。

「そうなんですか？　なら、大変でしょうね。言葉が伝わらないのは不安でしょうしね」

『それで、美波は文月学園に通うんだけど』

「あぁ、それなら、案内しますよ。俺は今から買い物しに行くんでここら辺の案内もしますよ」

雪成は特に深くも考えずに買い物のついでに街の案内をすると言うと夫婦は喜ぶが雪成と同じ年の『島田美波』と名の少女は不安そうな表情をしており、

「えーと、ドイツ語かぁ……『真田雪成です。君の名前は？』」

『えっ！？　ド、ドイツ語？』

『あれ？　雪成くんはドイツ語を話せるのかい？』

雪成は苦笑いを浮かべると自分の名前をドイツ語で名乗り、美波と男性は驚きの声をあげると、

『母方の祖母がドイツ人なんですよ。少しくらいなら話せます。それで』

『美波、島田美波です』

『葉月は葉月です』

雪成は自分がドイツ語を話せる理由を話すと聞きなれた言葉に娘２人は安心したようで雪成の前に現れると自分達の名前を名乗り頭を下げ、

『それで案内だけど』

『お願いします』

『はいです。お兄さん、よろしくです』

雪成は改めて街を案内するかと聞くと美波と葉月は頷き、

『それじゃあ、雪成くん、2人をお願いしても良いかな』

『ええ。それじゃあ、行こうか？』

雪成は買い物のついでに美波と葉月を連れて街を案内する。

オリキャラデータ
真田雪成（サナダユキナリ）
所属　1－D
性別　男
備考
ドイツ人の祖母を持つ少年。祖母からドイツ語を習っており、通常会話くらいはできる。両親はとても仲が良く、雪成を置いて2人で旅行に行く事も多いため、料理は簡単なものは作れる。成績は中の上で可もなく不可もなく、どちらかと言えば勉強よりは身体を動かすのが好きなタイプ。性格はお人好しのところもあり、苦笑いを浮かべたり、文句を言いながらも頼まれた事は断らないため、友人からはツンデレ扱いされており、本人はその評価が酷く不満である。中学時代は空手部に所属。高校ではどうするかは考え中。設定を文月学園入学時においてあるため、原作キャラとの繋がりはなし。
得意教科：現代文、英語
苦手教科：数学

バカとテストと召喚獣～闇に住まう物～　第1問（前書き）

原案です。主人公は現段階では全くなし、瞳の色が緋色と異能者と言うところのみです。

オカルトをメインで書いてみたくなりました。

ヒロインは宏美。意味はありません。何となくです。

絶対に本編に沿えませんね。試召戦争にまずは参加しない気がする。

バカとテストと召喚獣～闇に住まう物～　第1問

少女はいつもより部活の時間が長引き、見たいテレビ番組が有ったため、部活が遅くなると絶対に通らない裏道をたまたま通った時に『それ』に遭遇した。

薄暗く光る街灯がポツポツと光るなか、少女は少し周りを警戒しながら足早にこの裏道を通り過ぎようとするが、裏道の中央付近まで歩を進めた時、

「…て、……て行かな…で、……けて、……って、わた…のか……に」

（あれ？　……今、何か聞こえた？）

少女の耳には『聞こえてはいけない声』が届き、少女はそこで歩みを止めてしまう。

「……見つけた。わたしの変わり」

「えっ！？　な、何よ。これ！？」

少女が止まったの様子に先ほどまでは途切れ途切れだった声がよりはっきりとしたものに変わり、少女は声が聞こえた街灯の下に目線を送るとそこには黒い影のみが立っており、少女は直感的に目の前に存在している物がこの世界と関わってはいけないものだと理解して反射的にこの場から逃げ出そうと脳は体に足に命令を出すが体は自分の物とは思えないくらいに重く、1歩も動く事は出来ない。

「……そう。中林宏美ちゃんって言うのね」

「な、何で、わ、私の名前を！？」

「私の名前？　違うわ。今日からこの名前は『私の名前』」

黒い影は少女の名前を呼ぶと少女はこの影の目的が理解出来ずにいるが黒い影は少女の名前を『自分の物』と言い少女の頬にそっと手のように見える部分を当てる。

「かはっ！？」

その手に触れられた瞬間、少女の体には体と心を切り離されるような言葉に出来ない痛みが走り、少女は目を見開き、体の奥からは体から何かを無理やり引き離されて行くような感覚がし、

（わ、私、死んじゃうの？）

「違うわ。あなたには手に入れるのよ。死んでしまえたらと思えるほどの永遠の時間をね。１人で誰も気づく事のない永遠の時間」

少女は自分の死を受け入れるしかないと思うがその考えをあざ笑うかのように目の前の影は応える。

「……ねえ。助けないの？」

「……必要がない。せっかく、エサが紛れ込んでくれたんだ。出てくるまで待って居れば良い。それにただ働きをする気もねぇよ」

少女に影が襲いかかっている姿を見る２つ影があり、影はどうやら

少年と少女のように聞こえ、少年の声は影が少女から何かを奪う時を待っているようであり、冷たく淡々とした口調で言う。

「……冷たくない？　結構、かわいいわよ。助けてお近づきになるとかさ」

「……ないな。だいたい、この街で『歪み』が増えているのは召喚システムだか何だか知らないが理解できないものを無理やり抑えつけた結果だろ。俺はそこに出来た『歪み』を生業に生きるもの。それ以上も以下もない」

「つまり、助ける気はないと？」

「あぁ」

「でもね。相手はそうも行かないみたいよ」

傍観を決め込もうとしている影に少女に襲いかかっていた影は振り返り、2人に向かい衝撃波を飛ばす。

「……お前が騒ぐから気づかれただろ」

「良いでしょ。ちゃんと倒せばお金になるんだから」

「こんな小さな『歪み』を喰らってもたいした金にもならねえよ。まぁ、流石に身は守らないといけないな」

少年は気だるそうにため息を吐くと衝撃波は霧散し、

「……ったくよ。消えろよ」

少年は影との距離を一気に縮めると右腕で影の心臓部を削り取り、影は少年の攻撃に影を維持出来なくなってしまったのか霧散して行き、

（……わ、私、助かったの？）

影に捕らえられかけていた少女は影から解放されると支えがなくなったようで倒れそうになるが、

「……ったく、面倒だ」

そんな少女の体を少年は支え、

（……誰？　緋色の瞳？）

少女は影に捕らえられかけていた事で体力や精神力を根こそぎ持っていかれたようであり、意識が途切れるなか、少女の目には緋色に光る少年の瞳だけが印象強く残る。

サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｋｙ～　第１問

（……来週には日本か？　日本語なんてわからないし）

公園のベンチで１人の少女『島田美波』は空を見上げて小さなため息を吐く。

（……日本になんか行きたくない。でも、葉月が泣いちゃうし）

美波は両親の仕事の関係で幼い日からドイツで暮らしており、両親の仕事で日本に戻る事になったのだが暮らし慣れたドイツを離れたくない思いが強いようでもう１度、ため息を吐いた時、

「下がれ！！　この子がどうなっても良いのか！！」

「へ？　な、何？　何なの？」

「騒ぐんじゃねえ！！　死にたいのか！！」

ナイフを片手に周りを警戒する男性が美波をつかみ、彼女の首筋にナイフの刃を当てると美波はいきなりの事で声をあげるが男性は興奮しているようで美波を怒鳴り散らす。

「……ったく、バカな事をしていないで、荷物を返して、その女を解放しろ」

「だ、黙れ！！　近づくんじゃねえよ！！　ガキのくせに俺をバカにしやがって」

「……年寄りを吹っ飛ばして荷物を盗んだバカをバカにして何が悪い」

「ちょ、ちょっと、あんた、何、挑発してるのよ！？　見てよ。今、女の子がピンチなのよ」

その時、1人の無表情な少年がこちらに近づいてくると男性は少年にナイフを向けるが少年の表情は変わる事も美波の事など気にかけている様子もなく美波は声をあげると、

「ん？　すまん。胸がないから、女だと気付かなかった」

「何ですって！！　ちょっと放しなさいよ！！　あの男、私が気にしている事を！！」

「さ、騒ぐな！？」

少年は気にする事ないばかりか美波の気にしている少し周りの同じ年の少女達より寂しい胸をバカにされた事に少年を怒鳴りつけると男性は声を上げた美波の様子に驚いた時、

「……死ね」

「な、何なの！？」

少年の腕にはなぜか打ち上げ花火が握られており、美波を人質に取っていた男性の腕を撃ち抜いた後に花火は美波の身体に当たる事なく男性を撃ち抜いて行き、男性の手から美波が放れる。

「こい」

「へ！？」

少年は男性の手から美波が放れた瞬間を見逃す事はなく、美波の手を握りしめると美波を引き寄せ、美波は少年の腕の中にすっぽりと収まると、

（……な、何？）

美波は自分を抱きしめている少年の顔を見上げると少年の顔は奇麗に整っており、悪態を吐きながらも自分を助けてくれた少年の体温に自分の体温があがって行くのを感じる。

『ご協力ありがとうございました！？　ま、前田博士！？』

「前田博士？」

「ん？　どうかしたか」

騒ぎの原因になっていた男性は駆け付けてきた数名の警察官に取り押さえられ、警察官の１人が少年に頭を下げようとした時、少年の顔を見て驚きの声を上げると美波は首を傾げながら少年の顔をもう１度見上げるが少年は警察官が驚いている意味がわからないようで首を傾げると、

「俺の事は気にしないで良い……悪いな。ケガはないか？」

「ちょ、ちょっと、何よ？」

少年は美波の顔を覗き込むと彼女にケガはないかと確認し始め、美

波は目の前に映る少年の顔を見て、少年から視線を逸らす。

「小さいが擦り傷が付いてるか」

「ちょ、ちょっと、近い！？　近いわよ！？」

「動くな……これで良いな」

少年は美波の顔を覗き込むと頬には小さな擦り傷があったようで懐から小さな薬瓶を取り出すと美波の頬に薬を塗り、絆創膏を貼りつける。

「あ、ありがとう」

「ん？　気にするな。巻き込んだのは俺じゃないな……文句はあの窃盗犯に言え」

「言えるわけがないでしょ……あれ？　あんたって日本人？」

美波は少年にお礼を言うと少年は美波に自分が頭を下げる理由はないと思ったようで美波に警察官に捕まっている男性を指差すが美波は少年の様子に大きく肩を落とした時にドイツ語で会話をしていたため、気づくのが遅れたが少年が日本人だと言う事に気づき、

「あぁ。そうだ。前田理音だ」

「わ、私は島田美波よ」

少年は自分の名前を『前田理音』と名乗ると美波は慌てて自分の名

前を名乗ると、

「あんた、日本人なのになんでドイツにいるの？　両親の仕事の関係？」

「いや、今は学会で新技術発表があってな。１週間程度ドイツに滞在する予定だ」

「学会？　新技術発表？」

美波は理音がドイツにいる理由を聞くが理音の口から出る言葉は明らかに同年代の少年から出る言葉ではなく、美波は首を傾げる。

「説明が面倒だな。これで良いか？」

「名刺？　……えーと、どう言う事？　あんた、私と同じ年くらいでしょ？」

「ん？　簡単に説明すると俺は天才と言うものに分類されるわけだ」

理音は説明が面倒なようで懐から名刺を取り出して美波に渡すとその名刺には少年がアメリカの大きな研究所の研究員である事を示しており、美波は理音の経歴が信じられないようで目を白黒させるが理音は気にする事なく、自分を天才だと言い切り、

「天才？　あんたが？」

「あぁ。世間一般ではそう言われるらしい。別に興味などないがな」

美波は理音の顔と名刺を交互に見比べ、その行動は理音の事を知っ

ている人間から見るとかなり失礼なのだが理音は気にする事はなく、

「悪いな。俺はそろそろ、行かないといけないんだが」

「あ、あのさ。ちょっと待って。あんたって天才なのよね？　日本語ってわかる？」

「……何を言っているんだ？　美波だったか、お前も日本人だろ」

理音は時間を確認すると時間がないのか歩き出そうとするが、美波は何かあるようで理音の腕をつかみ、日本語を教えて欲しいと言い出し、理音は美波の言葉に意味がわからないようで首を傾げる。

「そ、そうなんでけど、私、小さい頃からドイツに住んでるから日本語ってわからないのよ。それなのに来週には日本に帰る事になって、日本語がわからないし」

「そう言う事か？　……悪いが他を当たってくれ。俺はそんなにヒマじゃない」

「ちょっと待ってよ。お願いよ」

美波は今の自分の状況を放すと理音は状況を理解したようだが自分に彼女の相手をする理由がないため歩き出そうとするが美波は必至なようで理音の腕に抱きつき、

「……しつこいぞ」

「良いでしょ。天才なんだから、それくらい手伝ってよ」

理音は美波を引きずったまま歩きだす。

「……ここまで付いてくるとはお前はバカか？」

「う、うっさいわよ。だいたい、あんたが私に大人しく日本語を教えてくれれば良いわけでしょ」

結局、美波は理音の泊まっているホテルまで付いてくると理音は根負けしたようで大きくため息を吐いて美波を自分の借りている部屋まで入れると美波は文句があるようで頬を膨らませ、

「ったく、日本語を教えろと言うのにまったくの無計画なのか？だいたい、
１週間程度で覚えれるほど、お前は賢いのか？」

「それを考えるのが天才のあんたでしょ」

「……まったく、簡単に言ってくれる」

理音は美波の様子の眉間にしわを寄せて１週間程度で何ができるのか聞くが美波は頬を膨らませたまま無責任に理音で任せであり、理音はその様子に大きくため息を吐く。

「だいたい、日本語なら両親に教わるのが普通だろ。それも普通に考えて会ったばかりの人間の後にホイホイ付いてくる人間がどこにいる？」

「あっ！？　……」

「おかしな警戒をするな。だいたい、そんな貧相なものに欲情などするか」

「な、何よ！！　その態度は」

理音は美波の行動は常識から外れていると言うと美波はホテルの部屋に同年代の理音と2人っきりの事に気づき、理音を警戒するように理音から少し距離を取るが理音は美波の胸を見て呆れたような表情をすると美波は気にしている事をバカにされたため、理音を怒鳴りつけるが、

「……落ち着け。だいたい、文句を言いたいのはこっちだ。俺はお前を助けてもなんの得もないんだぞ。だいたい、さっきも言ったが日本語なら両親に習えと言うか日本に戻る事も考えられる仕事だったんだろ。それを怠ったのはお前の両親だろ。なぜ、俺がお前の両親の尻拭いをしないといけない」

「そうかも知れないけど」

「まったく」

「な、何！？　あ、あんた、まさか！？　ダメよ。私だっていろいろと」

理音は落ち着いた様子でもう1度、美波に両親に日本語を習うように言うが美波は何かあるのか首を横に振り、理音はため息を吐くと彼女の頬に手を伸ばし、美波は理音のいきなりの行動におかしな勘違いをしているようで美波は驚きの声をあげる。

「……だから、何度も言ってるだろ。おかしな勘違いをするな。美

波、お前の日本に帰った時の住所を教えろ。必要なものができたら送ってやる」

「う、うん。ありがとう。えーと、ダメよ。私、漢字が書けないのよ」

理音は何か思いついたようで美波に日本に帰った時の住所を聞くと美波は理音の言葉に大きく頷くと日本の住所を書こうとするが住所を日本語で書けない事に気づき、

「……お前、本当に頭は大丈夫か？」

「な、何よ？」

「携帯は持っているか？　メールアドレスでも良い。わかったら、このアドレスに住所を送信しろ。必要なものができたら、送ってやる」

「う、うん。そうする。ゴメンね。迷惑をかけて」

「そう思うなら、熱くなるな。頭に血が昇っている間は間違った事しかできなくなるぞ」

理音は美波の様子に完全に呆れており、美波は理音の様子に流石に悪い事をしている事に気付き始めているようで申し訳なさそうな表情をして謝り、理音はそんな美波の様子に表情を変える事なく言う。

「理音、こんなところで何してるの？」

「ん？　美波か？　……なんだ？　この小さな生物は？」

美波は理音と出会った翌日に、彼と出会った公園を妹の『島田葉月』の手を引いて散歩していると理音がベンチに座り、空を眺めているのを見つけて声をかける。

「小さな生物じゃないです。葉月は葉月です」

「……そうか」

「理音、この子は私の妹の葉月よ」

葉月は理音に小さな生物と呼ばれた事が不服なようで頬を膨らませるが理音は気にする事なく空を眺めており、美波はそんな理音の様子に苦笑いを浮かべると理音に葉月を紹介し、

「お姉ちゃん、このお兄ちゃんはお姉ちゃんの彼氏さんですか？」

「は、葉月！？　いきなり、何を知ってるのよ！？」

葉月は理音の隣に座って、理音の顔を覗き込むと葉月は美波に理音は彼氏かと聞くと美波は葉月の言葉に驚きの声をあげる。

「……小さな生物、何をおかしな事を言っているんだ」

「葉月です」

「……葉月、おかしな事を言うな。現状で言えば、お前の姉は俺の依頼人であるだけだ。依頼料の交渉はまだだがな」

理音は葉月のおかしな勘違いを否定すると理音は美波から1つの依頼を受けているだけだと話し、

「そうなんですか」

「……」

葉月は少しだけつまらなさそうな表情をする隣で美波は少しだけ理音が自分の事を何とも思っていない事にショックを受けているようであり、

「それで、こんなところで何をしてるの？」

「ん？　あぁ。美波、お前を待っていたんだ。これを渡そうと思ってな」

「何これ？　ＵＳＢ？」

葉月は自分が理音の言葉にショックを受けるはずはないと大きく首を振ると理音に公園にいる意味を聞き、理音は欠伸をした後、ポケットからＵＳＢメモリーを取り出して美波に渡すが美波は意味がわからないようで首を傾げる。

「簡単な独和と和独の辞書のようなものだ。一般的な会話で使うものなら、それでしばらく勉強していろ」

「これ、私のために作ってくれたの？」
「……そう言う約束だろ。まったく、忙しいなか、作ってやったんだ。無駄にするなよ」
「う、うん。ありがとう」
理音はＵＳＢメモリーの中にあるものを説明するとあまり寝ていなかったのか欠伸をしながらベンチから立ち上がり、美波は愛想こそないが自分のわがままを聞いてくれる理音の事が気になるようでちらちらと理音を見ながら礼を言い、
「それじゃあ、俺はホテルに帰るぞ……」
「お兄さん、お腹減ってるですか？」
理音はホテルに帰ろうとした時、理音の腹の虫が鳴き、葉月は理音の様子にくすくすと笑う。
「……あぁ。そう言えば、昨日から何も食ってなかったな」
「き、昨日って、理音、あんた、何をしてるのよ？」
「ん？　気にするな。こんなのはいつもの事だ。何かに集中し始めると睡眠も食事も身体も脳も忘れる」
理音は表情を変える事なく、食事をとっていなかった事を白状すると美波は慌てるが理音にとっては日常茶飯事の事のようであり、

「そんな大切なものを忘れるわけがないでしょ。ちょっと、来なさい。葉月、帰るわよ」

「ハイです。お兄さんも行くです」

「待て。どうして、そうなる？」

「良いから、来なさい。これのお礼とでも思っていなさいよ」

美波は理音の腕をつかむと理音を引きずって歩きだし、葉月は理音と美波の様子に何かを感じているのか嬉しそうな表情で理音の手を握り、美波と葉月は理音を自分達の家に連れて行く。

俺と美春とFクラス？　第5問

「ったく、代表が腰ぬけでやってらんねぇぜ」

「ゆ、雄二、落ち着くのじゃ。代表の言い分も正しいのじゃ。身体の弱いものがいるなら、負けてしまった時の事を考えると簡単には開戦には踏み出せんのじゃ」

休み時間になると雄二は夏輝に聞こえるように代表批判を始め出し、それを『木下秀吉』と言う爺言葉を使っている少年が止めている姿に、

「ちょっと、坂本、感じ悪いわよ。あんたの言い方にも問題があったんでしょ？」

「し、島田さん、でもさ、納得がいかないよ」

美波は雄二とも友人なようで雄二に反省するように言うが雄二は反省する姿も見せず、明久、雄二、秀吉、美波の４人は去年からの友人のようで明久は美波が自分達の味方をしてくれない事に戸惑っているようである。

「……あ、あの。代表は何も言わないんですか？」

「俺は何も言うつもりはないよ。自分の非も理解できないゴリラに話が通じるとは思えない……あっ、ゴリラと比べるとゴリラに失礼だよね」

「てめえ、バカにしてんのか！！」

「ゆ、雄二、落ち着くのじゃ！？」

「そうだ。姫路さん、俺と美春はこれから回復試験を受けないといけないんだけど、姫路さんも回復試験を受けるよね？　途中退席をしたなら、点数がないはずだし、申請をしといて問題ないかな？」

「は、はい。お願いします」

瑞希は自分の体調の事で迷惑をかけている事を理解しているようで表情を曇らせながら夏輝に声をかけると夏輝は雄二と話をする気はないと言うと４教科以外の点数を回復させないといけないため、回復試験を申請すると準備をするから瑞希にも回復試験を受けるように言うと瑞希は慌てて返事をすると、

「回復試験って、試召戦争をやる気になってくれたの？」

「……うるさいな。必要な事をするだけだよ。何も考えないで試召戦争を始めようとしたバカ２人に言っておく。俺は４教科しか点を取れてないんだ。それ以外で仕掛けられた時点で試召戦争は終わり、代表の点数も知らないで試召戦争を仕掛ければ簡単に終わっていただろうな」

明久は夏輝が試召戦争をしてくれる気になったと思ったようで夏輝に駆け寄ってくるが夏輝は当然の事をしていると言うと考えたらずで試召戦争を始めようとした雄二をバカにし、

「４教科とはどう言う事じゃ？」

「家庭の事情。それ以上もそれ以下もないよ。木下さん」

「ワシは男じゃ！？」

「え？　そうなの？」

「何を言ってるんだよ。秀吉の性別は『ひ・で・よ・し』だよ」

夏輝が４教科分しか点数がないと知り、秀吉は首を傾げると夏輝は秀吉の性別を間違えていたようで秀吉は声を張り上げるが明久は夏輝に向かい秀吉は男でも女でもないと言う。

「……吉井、去年からの友人なら、木下の話を聞いてやれよ」

「そうなのじゃ！！　誰が何と言おうとワシは『男』なのじゃ！！
代表はわかってくれるのじゃな」

夏輝は明久の反応にため息を吐くと秀吉は嬉しそうに笑うが、

「ま、待つのじゃ！？　な、なぜ、目をそらすのじゃ！？」

「……いや、何となく、吉井の言う事もわかるような気がした」

夏輝は秀吉の笑顔の可愛さに秀吉から目を逸らす。

僕と私の共同生活？　第３問

「ここが文月学園ですか？」

「そうだけど……ねえ。明菜ちゃん、転入試験ってどうしたの？」

明久の案内で明菜は４月から通う事になる文月学園の校門の前に立つと明久は明菜が文月学園にきた事がない事に疑問を感じたようである。

「えーとですね。それなんですけど、転入試験をしてないんです。転入の許可を書類で出したら、受理をされて、４月からはＦクラスに転入すると連絡を受けてます」

「Ｆクラス！？　ちょっと待ってよ。明菜ちゃんって進学校に通って立って聞いたんだけど」

「はい。それなりに新学校みたいですね。あまり気にした事はないですけど、それより、どうかしたんですか？」

明菜のＦクラス転入は明久にとって驚きの事だったようで明久は慌てるが明菜は明久が慌てている意味がわからないようで首を傾げた時、

「吉井、春休みに学校にきて、今日は何をしたんだ！！」

「ひゃう！？」

「て、鉄人！？　べ、別におかしな事をしにきたんじゃな！？」

筋肉隆々の男性が明久を呼び、明菜はいきなりの事に驚きの声をあげて明久の影に隠れると明久の頭に拳骨が振り下ろされる。

「西村先生と呼べ。何度言ったらわかるんだ？　……ん？　見かけない顔だな」

「あ、あの」

「あ、明菜ちゃん、えーと、ウチの生活指導の西村先生、西村先生、この子は僕の従妹で４月から転入してくる吉井明菜ちゃん」

男性は明久の自分への呼び方に敬意が足りないと言いたげに言った時、明久の後ろに明菜がいる事に気づき、首を傾げるが明菜はいきなり明久に拳骨が振り下ろされた事で完全に怯えており、不安そうに明久の服をつかむと明久は頭を押さえながら明菜に男性を文月学園の教師だと紹介し、

「あ、あの。４月からお世話になります。吉井明菜です。西村先生、よろしくお願いします」

「吉井明菜？　あぁ、君がか、生活指導の西村宗一だ」

明菜は明久の後ろから身体を出すと深々と頭を下げ、西村教諭も明菜の名前は聞いているようで明菜に自己紹介をすると、

「鉄人、どう言う事だよ。明菜ちゃんは転入生なのに振り分け試験がないっておかしいだろ！？」

「……吉井、何度も言わせるな。西村先生と呼べ」

明久は明菜のために西村教諭に喰ってかかるが明久の頭の上には再度、拳骨が振り下ろされる。

「それはそうなんだが、学園の決まりでな。俺も口だしできないんだ」

「に、西村先生、頭をあげてください！？」

「役立たず」

「吉井！！」

「だって、そうだろ。姫路さんの振り分け試験もそうだけど、融通が利かなさすぎだろ？」

西村教諭は申し訳なさそうに明菜に頭を下げると明菜は目上の人に頭を下げられて慌てるが対照的に明久は文句があるようで西村教諭に喰ってかかり、

「……それに関しては俺だってどうにかしてやりたいがウチは試験校で実戦主義を掲げているからな。例外はどうにもならないんだ」

「それをどうにか……明菜ちゃん？」

「あ、明久くん、わ、私は何があったかわかりませんけど、西村先生も明久くんの言いたい事をわかってると思います。それなのに西村先生を責めてはいけないと思います」

「……そうだね。鉄人は融通は利かないけど、そう言うのはわかっ

てくれるんだった」

西村教諭は明久の言い分も充分に理解しているがどうにもできないと首を横に振る姿に明菜は明久を止め、明久は明菜の行動で冷静になったようで小さく笑みを浮かべる。

僕と幼なじみな新任教師？　お知らせ

どうもです。

『僕と幼なじみな新任教師？』を連載化しました。

教師設定と言う異色の作品がどのような風に進んで行くかはわかりませんが引き続きよろしくお願いします。

以下は穴埋め用の蓮夜の設定です。

久島蓮夜（クジマレンヤ）
年齢：２４
性別：男
備考
吉井玲・明久姉弟の幼なじみ。人当たりがよく、昔は明久を玲の魔の手から守る事も多々あった。そのため、蓮夜にとっては明久は今も昔も手のかかる可愛い弟であり、明久も蓮夜には頭が上がらないようである。西村宗一の補佐をする立場のため、どの教科もまんべんなく教える事ができ、フィールドの展開も全ての教科で行える。現在の試召戦争用の総合教科の点数は高橋洋子、西村宗一、福原慎の次の４番目。
基本的には向上心は強く、自分の授業以外は他の教師陣から専門的な事も聞いており、成績は向上中。赴任早々に船越先生に目をつけられるが上手く交わしている。
明久には話していないが高校時代より玲と交際しており、現在も玲の突拍子のない行動に困りながらも仲良くやっている。

サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｋｙ～　第１問

（……来週には日本か？　日本語なんてわからないし）

公園のベンチで１人の少女『島田美波』は空を見上げて小さなため息を吐く。

（……日本になんか行きたくない。でも、葉月が泣いちゃうし）

美波は両親の仕事の関係で幼い日からドイツで暮らしており、両親の仕事で日本に戻る事になったのだが暮らし慣れたドイツを離れたくない思いが強いようでもう１度、ため息を吐いた時、

「下がれ！！　この子がどうなっても良いのか！！」

「へ？　な、何？　何なの？」

「騒ぐんじゃねえ！！　死にたいのか！！」

ナイフを片手に周りを警戒する男性が美波をつかみ、彼女の首筋にナイフの刃を当てると美波はいきなりの事で声をあげるが男性は興奮しているようで美波を怒鳴り散らす。

「……ったく、バカな事をしていないで、荷物を返して、その女を解放しろ」

「だ、黙れ！！　近づくんじゃねえよ！！　ガキのくせに俺をバカにしやがって」

「……年寄りを吹っ飛ばして荷物を盗んだバカをバカにして何が悪い」

「ちょ、ちょっと、あんた、何、挑発してるのよ！？　見てよ。今、女の子がピンチなのよ」

その時、1人の無表情な少年がこちらに近づいてくると男性は少年にナイフを向けるが少年の表情は変わる事も美波の事など気にかけている様子もなく美波は声をあげると、

「ん？　すまん。胸がないから、女だと気付かなかった」

「何ですって！！　ちょっと放しなさいよ！！　あの男、私が気にしている事を！！」

「さ、騒ぐな！？」

少年は気にする事ないばかりか美波の気にしている少し周りの同じ年の少女達より寂しい胸をバカにされた事に少年を怒鳴りつけると男性は声を上げた美波の様子に驚いた時、

「……死ね」

「な、何なの！？」

少年の腕にはなぜか打ち上げ花火が握られており、美波を人質に取っていた男性の腕を撃ち抜いた後に花火は美波の身体に当たる事なく男性を撃ち抜いて行き、男性の手から美波が放れる。

「こい」

「へ！？」

少年は男性の手から美波が放れた瞬間を見逃す事はなく、美波の手を握りしめると美波を引き寄せ、美波は少年の腕の中にすっぽりと収まると、

（……な、何？）

美波は自分を抱きしめている少年の顔を見上げると少年の顔は奇麗に整っており、悪態を吐きながらも自分を助けてくれた少年の体温に自分の体温があがって行くのを感じる。

『ご協力ありがとうございました！？　ま、前田博士！？』

「前田博士？」

「ん？　どうかしたか」

騒ぎの原因になっていた男性は駆け付けてきた数名の警察官に取り押さえられ、警察官の１人が少年に頭を下げようとした時、少年の顔を見て驚きの声を上げると美波は首を傾げながら少年の顔をもう１度見上げるが少年は警察官が驚いている意味がわからないようで首を傾げると、

「俺の事は気にしないで良い……悪いな。ケガはないか？」

「ちょ、ちょっと、何よ？」

少年は美波の顔を覗き込むと彼女にケガはないかと確認し始め、美

波は目の前に映る少年の顔を見て、少年から視線を逸らす。

「小さいが擦り傷が付いてるか」

「ちょ、ちょっと、近い！？　近いわよ！？」

「動くな……これで良いな」

少年は美波の顔を覗き込むと頬には小さな擦り傷があったようで懐から小さな薬瓶を取り出すと美波の頬に薬を塗り、絆創膏を貼りつける。

「あ、ありがとう」

「ん？　気にするな。巻き込んだのは俺じゃないな……文句はあの窃盗犯に言え」

「言えるわけがないでしょ……あれ？　あんたって日本人？」

美波は少年にお礼を言うと少年は美波に自分が頭を下げる理由はないと思ったようで美波に警察官に捕まっている男性を指差すが美波は少年の様子に大きく肩を落とした時にドイツ語で会話をしていたため、気づくのが遅れたが少年が日本人だと言う事に気づき、

「あぁ。そうだ。前田理音だ」

「わ、私は島田美波よ」

少年は自分の名前を『前田理音』と名乗ると美波は慌てて自分の名

前を名乗ると、
「あんた、日本人なのになんでドイツにいるの？　両親の仕事の関係？」
「いや、今は学会で新技術発表があってな。１週間程度ドイツに滞在する予定だ」
「学会？　新技術発表？」
美波は理音がドイツにいる理由を聞くが理音の口から出る言葉は明らかに同年代の少年から出る言葉ではなく、美波は首を傾げる。
「説明が面倒だな。これで良いか？」
「名刺？　……えーと、どう言う事？　あんた、私と同じ年くらいでしょ？」
「ん？　簡単に説明すると俺は天才と言うものに分類されるわけだ」
理音は説明が面倒なようで懐から名刺を取り出して美波に渡すとその名刺には少年がアメリカの大きな研究所の研究員である事を示しており、美波は理音の経歴が信じられないようで目を白黒させるが理音は気にする事なく、自分を天才だと言い切り、
「天才？　あんたが？」
「あぁ。世間一般ではそう言われるらしい。別に興味などないがな」
美波は理音の顔と名刺を交互に見比べ、その行動は理音の事を知っ

ている人間から見るとかなり失礼なのだが理音は気にする事はなく、

「悪いな。俺はそろそろ、行かないといけないんだが」

「あ、あのさ。ちょっと待って。あんたって天才なのよね？　日本語ってわかる？」

「……何を言っているんだ？　美波だったか、お前も日本人だろ」

理音は時間を確認すると時間がないのか歩き出そうとするが、美波は何かあるようで理音の腕をつかみ、日本語を教えて欲しいと言い出し、理音は美波の言葉に意味がわからないようで首を傾げる。

「そ、そうなんでけど、私、小さい頃からドイツに住んでるから日本語ってわからないのよ。それなのに来週には日本に帰る事になって、日本語がわからないし」

「そう言う事か？　……悪いが他を当たってくれ。俺はそんなにヒマじゃない」

「ちょっと待ってよ。お願いよ」

美波は今の自分の状況を放すと理音は状況を理解したようだが自分に彼女の相手をする理由がないため歩き出そうとするが美波は必至なようで理音の腕に抱きつき、

「……しつこいぞ」

「良いでしょ。天才なんだから、それくらい手伝ってよ」

理音は美波を引きずったまま歩きだす。

「……ここまで付いてくるとはお前はバカか？」

「う、うっさいわよ。だいたい、あんたが私に大人しく日本語を教えてくれれば良いわけでしょ」

結局、美波は理音の泊まっているホテルまで付いてくると理音は根負けしたようで大きくため息を吐いて美波を自分の借りている部屋まで入れると美波は文句があるようで頬を膨らませ、

「ったく、日本語を教えろと言うのにまったくの無計画なのか？だいたい、
1週間程度で覚えれるほど、お前は賢いのか？」

「それを考えるのが天才のあんたでしょ」

「……まったく、簡単に言ってくれる」

理音は美波の様子の眉間にしわを寄せて1週間程度で何ができるのか聞くが美波は頬を膨らませたまま無責任に理音で任せであり、理音はその様子に大きくため息を吐く。

「だいたい、日本語なら両親に教わるのが普通だろ。それも普通に考えて会ったばかりの人間の後にホイホイ付いてくる人間がどこにいる？」

「あっ！？　……」

「おかしな警戒をするな。だいたい、そんな貧相なものに欲情などするか」

「な、何よ！！　その態度は」

理音は美波の行動は常識から外れていると言うと美波はホテルの部屋に同年代の理音と2人っきりの事に気づき、理音を警戒するように理音から少し距離を取るが理音は美波の胸を見て呆れたような表情をすると美波は気にしている事をバカにされたため、理音を怒鳴りつけるが、

「……落ち着け。だいたい、文句を言いたいのはこっちだ。俺はお前を助けてもなんの得もないんだぞ。だいたい、さっきも言ったが日本語なら両親に習えと言うか日本に戻る事も考えられる仕事だったんだろ。それを怠ったのはお前の両親だろ。なぜ、俺がお前の両親の尻拭いをしないといけない」

「そうかも知れないけど」

「まったく」

「な、何！？　あ、あんた、まさか！？　ダメよ。私だっていろいろと」

理音は落ち着いた様子でもう1度、美波に両親に日本語を習うように言うが美波は何かあるのか首を横に振り、理音はため息を吐くと彼女の頬に手を伸ばし、美波は理音のいきなりの行動におかしな勘違いをしているようで美波は驚きの声をあげる。

「……だから、何度も言ってるだろ。おかしな勘違いをするな。美

波、お前の日本に帰った時の住所を教えろ。必要なものができたら送ってやる」

「う、うん。ありがとう。えーと、ダメよ。私、漢字が書けないのよ」

理音は何か思いついたようで美波に日本に帰った時の住所を聞くと美波は理音の言葉に大きく頷くと日本の住所を書こうとするが住所を日本語で書けない事に気づき、

「……お前、本当に頭は大丈夫か？」

「な、何よ？」

「携帯は持っているか？　メールアドレスでも良い。わかったら、このアドレスに住所を送信しろ。必要なものができたら、送ってやる」

「う、うん。そうする。ゴメンね。迷惑をかけて」

「そう思うなら、熱くなるな。頭に血が昇っている間は間違った事しかできなくなるぞ」

理音は美波の様子に完全に呆れており、美波は理音の様子に流石に悪い事をしている事に気付き始めているようで申し訳なさそうな表情をして謝り、理音はそんな美波の様子に表情を変える事なく言う。

「理音、こんなところで何してるの？」

「ん？　美波か？　……なんだ？　この小さな生物は？」

美波は理音と出会った翌日に、彼と出会った公園を妹の『島田葉月』の手を引いて散歩していると理音がベンチに座り、空を眺めているのを見つけて声をかける。

「小さな生物じゃないです。葉月は葉月です」

「……そうか」

「理音、この子は私の妹の葉月よ」

葉月は理音に小さな生物と呼ばれた事が不服なようで頬を膨らませるが理音は気にする事なく空を眺めており、美波はそんな理音の様子に苦笑いを浮かべると理音に葉月を紹介し、

「お姉ちゃん、このお兄ちゃんはお姉ちゃんの彼氏さんですか？」

「は、葉月！？　いきなり、何を知ってるのよ！？」

葉月は理音の隣に座って、理音の顔を覗き込むと葉月は美波に理音は彼氏かと聞くと美波は葉月の言葉に驚きの声をあげる。

「……小さな生物、何をおかしな事を言っているんだ」

「葉月です」

「……葉月、おかしな事を言うな。現状で言えば、お前の姉は俺の依頼人であるだけだ。依頼料の交渉はまだだがな」

理音は葉月のおかしな勘違いを否定すると理音は美波から1つの依頼を受けているだけだと話し、

「そうなんですか」

「……」

葉月は少しだけつまらなさそうな表情をする隣で美波は少しだけ理音が自分の事を何とも思っていない事にショックを受けているようであり、

「それで、こんなところで何をしてるの？」

「ん？　あぁ。美波、お前を待っていたんだ。これを渡そうと思ってな」

「何これ？　ＵＳＢ？」

葉月は自分が理音の言葉にショックを受けるはずはないと大きく首を振ると理音に公園にいる意味を聞き、理音は欠伸をした後、ポケットからＵＳＢメモリーを取り出して美波に渡すが美波は意味がわからないようで首を傾げる。

「簡単な独和と和独の辞書のようなものだ。一般的な会話で使うものなら、それでしばらく勉強していろ」

「これ、私のために作ってくれたの？」
「……そう言う約束だろ。まったく、忙しいなか、作ってやったんだ。無駄にするなよ」
「う、うん。ありがとう」
理音はＵＳＢメモリーの中にあるものを説明するとあまり寝ていなかったのか欠伸をしながらベンチから立ち上がり、美波は愛想こそないが自分のわがままを聞いてくれる理音の事が気になるようでちらちらと理音を見ながら礼を言い、
「それじゃあ、俺はホテルに帰るぞ……」
「お兄さん、お腹減ってるですか？」
理音はホテルに帰ろうとした時、理音の腹の虫が鳴き、葉月は理音の様子にくすくすと笑う。
「……あぁ。そう言えば、昨日から何も食ってなかったな」
「き、昨日って、理音、あんた、何をしてるのよ？」
「ん？　気にするな。こんなのはいつもの事だ。何かに集中し始めると睡眠も食事も身体も脳も忘れる」
理音は表情を変える事なく、食事をとっていなかった事を白状すると美波は慌てるが理音にとっては日常茶飯事の事のようであり、

「そんな大切なものを忘れるわけがないでしょ。ちょっと、来なさい。葉月、帰るわよ」

「ハイです。お兄さんも行くです」

「待て。どうして、そうなる？」

「良いから、来なさい。これのお礼とでも思っていなさいよ」

美波は理音の腕をつかむと理音を引きずって歩きだし、葉月は理音と美波の様子に何かを感じているのか嬉しそうな表情で理音の手を握り、美波と葉月は理音を自分達の家に連れて行く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2029u/

バカなテストの思いつき？

2011年10月26日08時09分発行